



# 目 次

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ごあいさつ 鹿児島県国際交流課長</li> </ul>	米田 順彦 --- 2
<ul style="list-style-type: none"> <li>・すばらしき「出会い」への期待 実行委員会会長</li> </ul>	弓場 秋信 --- 3
<ul style="list-style-type: none"> <li>・団 員 名 簿 / 事 業 日 程</li> </ul>	----- 4
<ul style="list-style-type: none"> <li>・マ レ イ シ ア の 地 図</li> </ul>	----- 6
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 団 員 手 記</li> </ul>	
サリマンドゥ村の友達	大浦地 拓生 --- 7
忘れられない体験	加藤 心 --- 13
私のマレーシア体験記	山口 正也 --- 16
7泊8日の奮闘記	関 真知子 --- 21
我々は幸せか？	湊原 政彦 --- 27
体験を通して学ぶ	小西 恵子 --- 32
異文化体験の中での発見	寺師 慶太 --- 35
本当の豊かさとは？	福永 由美子 --- 41
これが青年海外協力隊だ！	松崎 勝利 --- 45
私の第二のふるさと 「サリマンドゥ村」	坂口 晶子 --- 48
<ul style="list-style-type: none"> <li>・青少年海外協力体験事業を 振り返って</li> </ul>	橋口 和典 --- 55
<ul style="list-style-type: none"> <li>・編 集 後 記</li> </ul>	吉村 博幸 --- 68
<ul style="list-style-type: none"> <li>・関 連 の 新 聞 記 事</li> </ul>	----- 69

〈イラスト…宮園広幸 JOCV鹿児島OB会〉

## ご あ い さ つ

鹿児島県国際交流課長

米 田 順 彦

第1回鹿児島県青少年海外協力体験事業の御成功おめでとうございます。

日本の国際協力の最前線を担う青年海外協力隊の活動現場に県内の青少年を派遣し、実際にその活動を体験させることにより国際協力の一面を実感させ、真に国際性豊かな人材の育成を図るという趣旨で始められたこの事業は、全国にさきがけて本県において実施されたものであり、各方面から非常に大きな注目を浴びておりましたが、事業終了後の派遣団員の皆さんの成果報告を聞きますと、その所期の目的は十分に達成できたものと確信しております。

日本は、現在、世界のGNPの約15%を占めるほどの経済大国となり、世界経済に与える影響も格段に重いものとなっております。また、開発途上国の近代化のためにODA（政府開発援助）を中心とした国際援助に努めており、その総額も1989年度実績で89億ドルを越える額となり、世界一の援助大国にもなっておりますが、しかしながら、その膨大な援助の中身、効果についていろいろな問題点を指摘する向きも出てきているようです。

本県では、先般策定致しました総合基本計画の戦略プロジェクトの一つとして、民間国際協力を推進する拠点となる、アジア・太平洋農村研修村「カラモジア郷」を整備することになりました。

世界に問われる日本の国際協力の分野で、地域の特性を生かし、官民一体となった国際協力を目指し、開発途上国の農村リーダー等の育成のための技術研修、異文化体験による生涯学習の推進など、幅広い国際協力、交流活動を進めて参りたいと思います。

そのような中で、国際協力を身をもって実践している青年海外協力隊の実状に触れ、開発途上国の人との交流を実体験できたことは、今後の日本の将来を担う若い青少年にとって大変大きな刺激となり、日本が世界の中で置かれている位置付け、果たすべき役割等を新たな視点から理解するきっかけになったことと思います。

この事業が、青少年の国際化意識の高揚のために大いなる成果を挙げ、今後も一層充実した展開となるよう期待致します。

## 素晴らしき「出会い」への期待

鹿児島県青少年海外協力体験事業

実行委員会会長

弓 場 秋 信

(JOCV鹿児島県OB会会長)

青年海外協力隊は、発展途上国の国づくり、人づくりに貢献する目的で、国の事業として昭和40年に発足以来、今日まで、アジア・アフリカ・中近東・中南米・大洋州地域の46ヶ国へ10,000名を超える青年を隊員として派遣してきました。

この協力隊発足25周年を機に、鹿児島の青少年がマレーシアへ派遣中の隊員の活動現場を訪問し、協力体験を行い国際協力に対する理解を深めると同時に、現地の人々との交流を通して、国際性豊かな青少年の育成の一助になればとの趣旨で、この事業が始まりました。

中学生、高校生、専門学校生を対象に一般公募しましたところ、105名の応募があり、一次、二次試験を経て選ばれた10名の団員は、7泊8日の日程の中で、サバ州サリマンドゥ村での協力体験、ホームステイ、現地青少年とのスポーツ・レクリエーション、熱帯雨林再生のための苗木育成場の訪問、そして首都クアランポールの高校生との交歓会を行いました。

今回体験の場としてマレーシアを選んだ理由は、協力隊にとって最も長い派遣の歴史があり、治安もよく、日本から近いということもありますが、この国が複合民族国家で、マレー人・中国人・インド人が、それぞれの言葉を話し、異なる宗教を信じて、それらが渾然一体となり、あたかもアジアの縮図のようで、単一民族の中で育った日本人にとって「異文化体験」の場として最適の環境だからでした。

サリマンドゥ村でのホームステイでは、団員は生活環境、食事、トイレ、宗教等、日本との違いに驚きながらも、村人の温かい心に接し、異文化の壁を乗り越えて、人間と人間との交流が始まりました。

一方、協力体験の中からは、協力隊員が村人と共に生き、彼らに必要なものを一緒に考えて考え、作り出す姿に自分自身の将来像をそこに見ていた団員もいました。

短い期間ではありましたが、10名の団員には、新しい出会いがあり、そしていろいろな体験を致しました。また、世界への扉を自らの手で開き、歩き出しました。ここに記された体験記は、押さえることのできない彼らの気持ちの高揚をまとめたものです。この報告書が多くの中世代の人々に読まれることを希望致します。

最後に、この事業に御協力いただいた多くの皆様に、心より感謝申し上げます。

団 員 名 簿 (学年は平成3年3月現在)

氏 名	学 校 名	学年	住 所	出身地
大浦地 拓生	伊集院中	1	伊集院町	
加藤 心	内之浦中	2	内之浦町	
関 真知子	祁答院中	2	祁答院町	
寺師 慶太	鹿児島中央高	1	鹿児島市	
湊原 政彦	鹿屋農業高	1	佐多町	
山口 正也	市来農芸高	2	市来町	東町
松崎 勝利	阿久根高	3	阿久根市	
坂口 晶子	鹿児島東高	1	鹿児島市	
小西 恵子	鹿児島純心女子高	2	鹿児島市	高山町
福永 由美子	大島高	3	名瀬市	

(随行者)

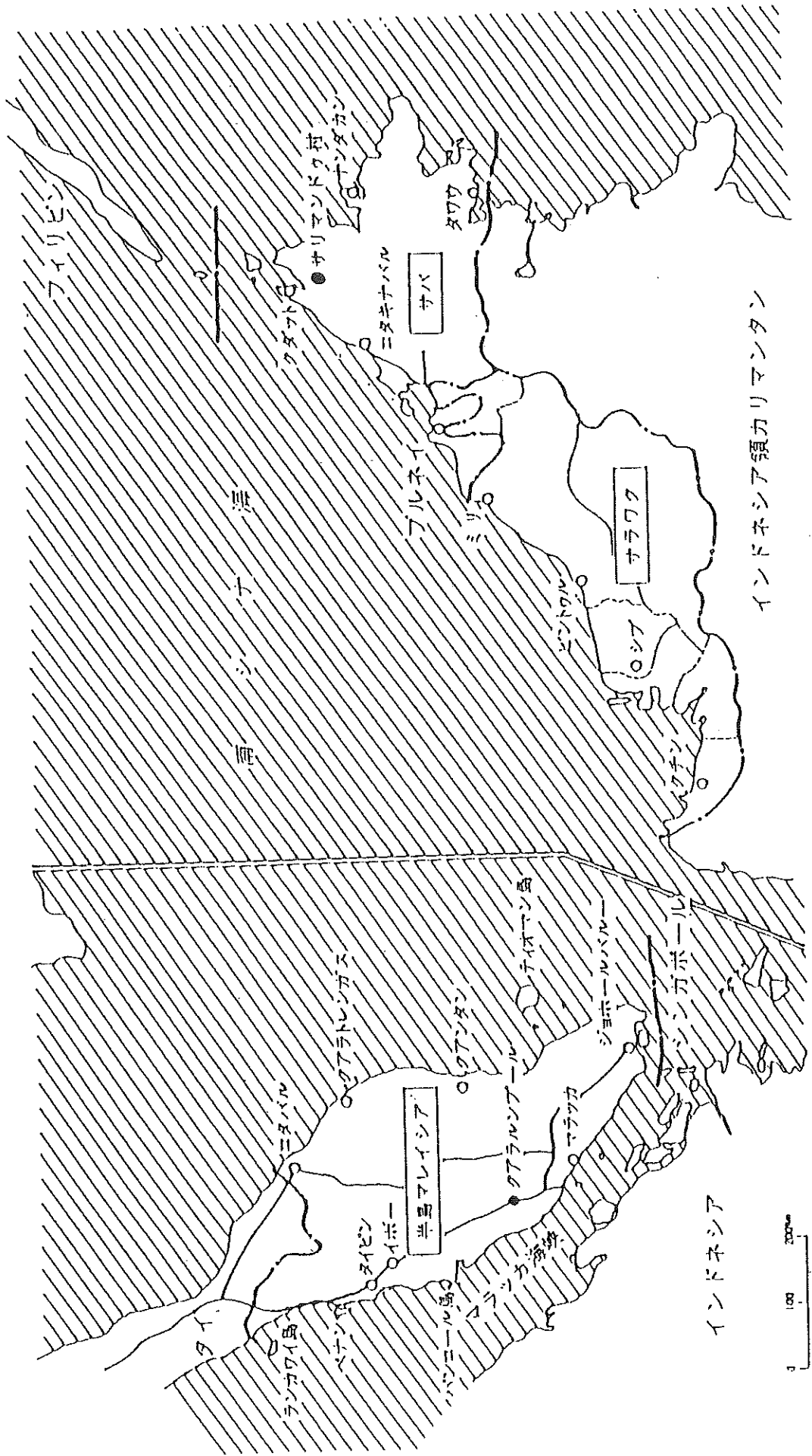
弓場 秋信	実行委員会会長・JOCV鹿児島県OB会会長
吉村 博幸	(財)鹿児島県国際交流協会
西田 健郎	JOCV鹿児島県OB会副会長 ((株)山形屋総務部営業課)
橋口 和典	JOCV鹿児島県OB会事務局長 (板元醸造(株)福山工場研究室)
狩集 尚美	JOCV鹿児島県OB会会計 (鹿児島女子短期大学)
森岡 和之	南日本新聞社 社会部
牛尾 純	南日本放送 報道制作局報道部

\* J O C V = Japan Overseas Cooperation Volunteers (青年海外協力隊)

## 事 業 日 程

1 日 目	3/27(水)	AM	結団式	ホテル泊
		PM	鹿児島→福岡→マレーシア (クアラルンプール)	
2 日 目	3/28(木)	AM	クアラルンプール→コタキナバル	ホテル泊
		PM	領事館・協力隊事務所訪問、在サバ州隊員たちによるウェルカムパーティ	
3 日 目	3/29(金)	AM	コタキナバル→サリマンドゥ村(協力隊員活動現場)	ホームステイ
		PM	協力隊活動に関するオリエンテーション、村人との交歓会	
4 日 目	3/30(土)	AM	各ホームステイ先で農作業等の手伝い	ホームステイ
		PM	現地青少年とのサッカーの交流試合	
5 日 目	3/31(日)	AM	村人たちとキヌモアリ溪流へハイキング	ホームステイ
		PM	農作業体験、サヨナラパーティ	
6 日 目	4/ 1(月)	AM	サリマンドゥ村→ティナンゴール村→サバ林業開発公社植林現場視察	ホテル泊
		PM	コタキナバル→クアラルンプール	
7 日 目	4/ 2(火)	AM	学校訪問(日本語教育隊員の活動現場視察及び日本語学生との懇談会)	ホテル泊
		PM	市内見学	
8 日 目	4/ 3(水)	AM	クアラルンプール→福岡	
		PM	→鹿児島(19:20 空着)	

# マレーシア



# サリマンドウ村の友達

大浦地 拓生

(伊集院中学校 1年)

3月27日 (水)

まだか、まだか、と待ちつづけていた日、3月27日がついにやって来た。自分でもうまくやっていけるか、やっていけないのかは分からない。でも、青少年海外協力体験団員に選ばれた以上胸をはって行動しようと思う。

今は、いろいろな思いが複雑にからみあっているが、終えるころには、この一週間を一生の宝として大事にしたいと思う。いや、そうでなければならぬ。成功、失敗、とまわりから言われるが、ぼくは成功、失敗などないと思う。なぜなら若い僕達10人が実際に見て、実際に話して、実際に体験するのだから10人全てがいろいろな思いを抱き、1人1人が何かを覚えて帰るはずだからである。観光なんかには大人になったらいつでもいける。しかし、実際にホームステイすることなんて、一生に1回あるかないかだろう。だからこそ1日1日を大切に体で覚えていきたい。

3月28日 (木)

今日はついに東マレーシアのコタキナバルに到着した。飛行機の中でいろいろなことを考えた。どんな人たちなんだろう。

緊張はするけどなんだかうれしい。自分は人なれしやすい方なので、すぐ仲良くなれるとは思うけど生活とか、ずいぶん苦労すると聞いている。しかし、どんなに苦労してもホームステイ先では、それ以上にたのしいことが待っているに違いない。最後まで精一杯がんばってみるつもりだ。遊ぶときは遊んで、働くときはしっかり働こうと思っている。

ウェルカムパーティのとき隊員の方々と話しをした。みんないきいきしている。目が輝いている。隊員の方々はここに来て何を学んだのだろうか。何だか団員としてのやるべきことが分かってきたような気がする。明日からホームステイ。自分なりにやりたいことはいっぱいある。見ることの出来ない風景を、生活を、たくさん見てみたい。

3月29日 (金)

今日は目的地サリマンドウ村にバスにゆられながらやっと着いた。みんな笑顔で出迎えてくれたサリマンドウ村の人たちを見て安心した。着いてからすぐに水道管の点検をしてまわった。水道管の点検は主に村の人たちみずから行っていた。日本のよう



に蛇口1つひねれば必ずしも水が出てくるわけでもない。雨季と乾季がはっきり分かれているから雨が降らない日が続くと水が出ないときもある。しかも日本のように設備が整ってなく、簡単な造りのため故障しやすい。日本では考えられないことだ。それでもみんなは笑顔をたやさない。村人たちはとてもいい人ばかりだ。村の人たちと一緒にいると、いろんな苦勞も忘れてしまう。

水道管の点検が終わって、村の子供たちとサッカーをした。ぼくがサッカーボールを持ってただけで「一緒にやろうよ」と誘ってくれた。言葉はなにを言っているのか分からなかった。しかし、僕には、そう言っているとしか思えない。言葉が通じなくても、通じる何かがあることが分かった。

言葉が分からないときには必死になってぼくが分かるまで伝えてくれる。伝えようと強く思っているときには必ず伝わる。不思議だ。

交歓パーティでは、まだ少しはずかしかった。パーティの最中マスندان一家と会った。ぼくがホームステイする家だ。子供が多いので僕にはぴったりだ。おばさんもおじさんもととてもやさしそうだ。家に着くと、洗濯物はないとか、ど

食べてとか言ってくれて、うれしくてたまらなかった。遠い友達だけど、友達は友達。今日はいい友達をまた増やした。明日も明後日も友達を増やしたい。

夜、けん玉を子供たちにあげて手本を見せた。喜んでもらえたみたいでうれしい。もし、家が近くだったら、毎日遊びにいきたい。こんなにいい人たちばかりなのに、たった3日間しか一緒にいけないのは残念でしようがない。たった3日間だけその3日間を精一杯すごそうと思った。

### 3月30日(土)

朝ごはんを食べおえて、田んぼに稲かりに行った。ぼくは稲かりは生まれて初めてだ。日本では、かまを右から左にかけていく。しかし、ここでは逆だった。左から右にかけていった。ぼくには、左から右にかけていったほうがやりやすいような気がした。マスندانの家は家族が多いので1時



間ですんだ。家族が多いといえば、サリマンドウ村の人たちは、みんなが家族のようだった。みんなでご飯を食べたり、人の家の稲かりを手伝ったり。ぼくの目からは、みんな家族に見えた。そして、子供たちは親の手伝いをよくする。みんなで生活している。みんなで生活している。

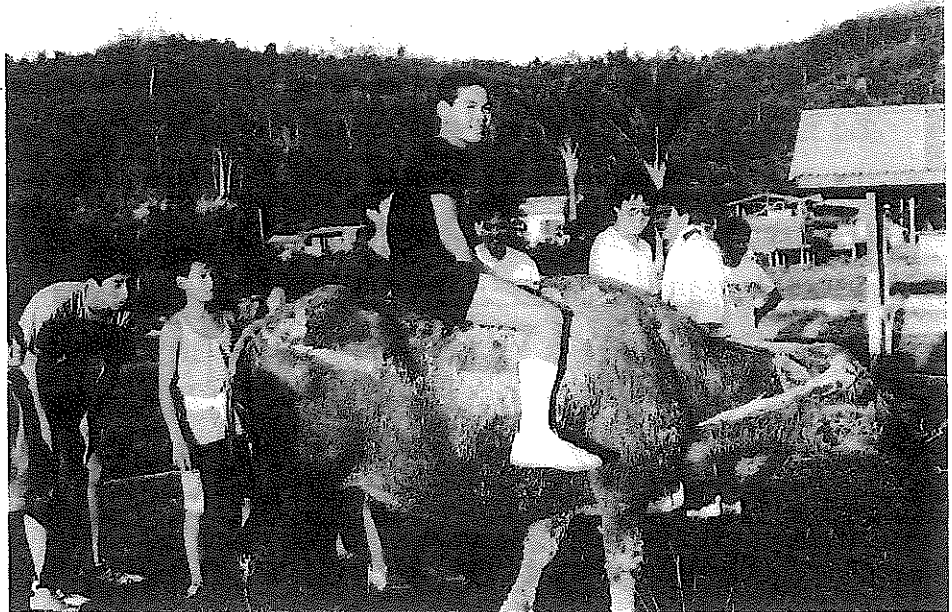
ぼくたちも、もちろん家族になりきった。たった3日間の家族だけど、でも、みんなと友達になった。もう、二度と会えないとしても一生の友達だ。僕は転校なども多いけどサリマンドウ村の人たちとは日本の友達よりもすぐに友達になれた。子供たちはすぐに寄り

添ってきたし、みんな話しかけてくれる。そういうときに、本当に来てよかったと思う。夕方、涼しくなってから村の青年たちとサッカーの交流試合をした。みんな楽しくやった。村の青年はとても元気だ。疲れても、汗をかいても笑顔だけはたやさない。ぼくには、そのことだけは頭にしっかり焼きついている。

やしの実も竹でとってもらった。やしの実の部分より、中の水分の方がおいしかった。ほかに果物をたくさん食べた。日本の生活もいいが、ぼくはサリマンドウ村の生活も大好きだ。退屈しないし、穏やかだ。

家に帰る前に水牛にも乗った。水牛は現地の言葉で「クルバウ」。クルバウを実際

に見たことさえ初めてなのに、それに乗れるなんて思ってもいなかった。日本中でクルバウに乗ったことのある人が何人いるだろうか。また1つ思い出がふえた。この村に来て初めて体験することが多い。むしろほとんどが初めての体験だ。



今日は、闘鶏も見た。闘鶏では、男の人たちがお金をかけていた。真剣そのものだった。村には小さい店が2つだけあった。他の買物は、市場から仕入れるそうだ。

日本とは、明らかに遅れている部分にも気がついた。水道設備、電気設備、米の脱穀の仕方。いろいろな部分が遅れている。そこで日本人のぼくたちは何をすべきなのか。何をしてあげられるのか。ここに来て学んだ部分がある。日頃日本人が、発展途上国の人々のことを考えてあげることはまずない。日本の人たちは、いかに幸せであるかがよく分かる。それにもかかわらず、日本人が発展途上国の人たちを無視するのは、はずかしいことだと思う。日本は援

助をできる国である。だからもっともって外国に協力をするべきである。日本がどんなに裕福であっても発展途上国やその他の外国の協力なしでは成り立っていかないと  
思う。

よく、発展途上国の人たちから「日本は金を出すだけだ。」と言われる。でも海外協力隊の方々を見ていると、本当に感心する。日本の若い人たちが、一生懸命頑張っている。協力隊員になりたい、と今までも何回も思ったことがあるが、やっぱり協力隊の方々頑張っているところを見たときが一番ひかれる。

帰ってマンディ（水浴び）をした。汗をかいたときに浴びると、とても気持ちがいい。今はほとんどの家が自宅でできるのだが、協力隊が入る前は、水道も使えないから遠い川まで歩いて行っていたそうだ。ぼくたちは特別に協力隊の活動や村の生活などを見ることができた。だから、何のために行ったのか、と後から言われないうようにしようと思う。

夜には、村の人と色々な話しをした。1日で楽しかったこと、うれしかったこと。何んとなんか分かってもらえたようだった。他に子供に日本語を教えたり、一緒にけん玉をやったり。言葉で分かってもらえないときは、絵を書いたりして伝えた。分かってもらえたときはとてもうれしかった。話しをたくさんした後、虫の音を聞きながらゆっくりねた。

### 3月31日（日）

今日は、村の若者たちと川を上流に逆のぼっていった。大きな岩がたくさんころがっていて、歩きにくかった。でも村の人は、すいすい登っていった。ぼくも、なんとかついていこうと思ったけど、全然追いつけなかった。ぼくたちは、休憩をしながら登っていった。暑くて、ジーンのまま川につかった。もちろんクツをはいたまま。1時間ぐらいたって、やっと目的地に着いた。ぼくたちが着いたときは、村人はもう泳いでいた。さっそくぼくたちもクツを脱ぎ、自然の岩でできたすべり台をすべった。日本でプールに入るのより、気持ちがいい。暑いうえに1時間も山道を登ってきたからだろう。暑さも忘れてはしゃいだ。多分、ぼくが団員の中で1番はしゃいだだろう。30分ぐらい泳いだ後、山を降りていった。降りるときは、ぼくは村の人たちをうらやましくおもった。自然がいっぱいで日本にはない物がたくさんある。物や自然、食べ物だけじゃなくて、村の人間にもなにかある。やさしさと笑顔だ。みんなやさしくみんな笑っている。いい人たちばかりだ。山を降りるのは、登るときよりも危険だった。ぼくが立ち止まると、先に行っていた村人は、手をさしのべてくれた。ぼくが笑って「テレマカシー」（ありがとう）というと、村の人も「サマサマ」（どういたしまして）と笑って答えてくれた。ぼくは、とてもうれしかった。その村人とは、今日初めて会ったのに。最後の1日だけ

また1人友達が増えた。

村にやっと帰り着いて、昼ごはんを食べた後、脱穀機のカバーを男の団員みんなで作った。田んぼに、うまい具合に動くかためしに行った。いまでも村の脱穀の方法はドラム缶や金網に打ちつける方法だった。自分でもしてみたけど、相当疲れる方法だ。日本の技術をもっと援助して、少しでも役にたてて欲しい。ぼくは、そう思った。いろんなことをマレイシアでしているうちに日本との違いが見えてきた。何だか少し自分が成長したような気がする。いろんなことをしている間に、あっという間に夕方になった。村人とのサヨナラパーティが始まる。浴衣に着替えて帯をぐっとしめた。ぼくの心もぐっとしまった。もうお別れ、これで最後と考えるととてもつらい。でも最後のパーティぐらい笑顔で通そうと思った。昼、おとしてもらったクルバウの肉を中心とした豪華な料理が台に並んだ。パーティではおどりをおどったり、歌を歌ったり盛大に行った。村人ともおどった。会った人にはあいさつをして、ガッチリ握手をした。もう一度会えるチャンスがあれば……。何度も考えた。パーティは静かに幕を閉じた。ぼくたちはサリマンドゥ村で最後の一夜を過ごした。

#### 4月1日(月)

ついにお別れの日が来た。まだ朝が早かった。バスに乗る前にできるだけ多くの人と握手をした。ホームステイ先のおばさん

も泣いてしがみついてくれた。本当の子供になれたみたいだった。洗たくをしてもらったり、クツを洗ってもらったり。自分で洗うと言っても無理矢理とってしてくれた。子供はみんな人なつっこく、最後まで僕についてきた。本当にやさしくていい人たちばかりだった。このサリマンドゥ村に来ていろんなことを学んだ。そして、これからは学んだことを生かしていかなければならない。おばさんに教えられたこともある。子供達に教えられたことも少なくない。今、全てのお世話になったみなさんにお礼を言いたい気分だ。また会ってお礼を言う日が来ることを願っている。

#### 4月2日(火)

昨夜、クアラルンプールに着いてホテルで一夜を明かした。今日は日本語教育活動現場を訪問し、生徒たちと日本語で懇談をした。みんな日本語がとてもうまかった。いろいろ日本語で質問されたので、ゆっくりと日本語で答えた。終わってから、僕に質問をしてくれた班の人に日本のコインをあげた。ぼくは日本語しかしゃべれないのに、マレイシアの生徒は英語と日本語とマレー語の3カ国の言葉をしゃべれた。僕も英語ぐらいはしっかりしゃべれるようになりたい。

#### 4月3日(水)

今日、青少年海外協力体験事業の全日程が終了した。長かったような、短かったよ

うな変な気がする。1週間でいろんなことを学び、いろんなことを考えた。今日でみんなともお別れだ。

この青少年海外協力体験事業が将来何かの役にたつと思う。その時ぼくは、この1週間をよく思い出してみようと思う。マレーシアに行って考えの変わった部分、深くなった部分、いろいろある。ぼくは、若いうちからこのような体験ができ本当に幸せだと思っている。



# 忘れられない体験

加藤 心

(内之浦中学校 2年)

「みず！水はでるっ。」

マレーシアから帰国後、寝ぼけた私がこんな寝言を何回も言ったそうです。もちろん本人は覚えていないわけですから、その話を聞かされた時は、寝言を言うほど今度の体験が心に残っていたのかなあと思いました。そして帰国後二、三日は何もかもが手つかずで、マレーシアでの生活が頭から離れず、溜息ばかり。やはり、私にとっては八日間という短い間でしたが一生忘れられない思い出（経験）となったのです。

私は、この八日間で都会と田舎をいっぺんに見たような感じがします。マレーシアの首都クアラルンプールは、東京に比べあらゆる所に緑があります。ビルも沢山あるのですがその間々に小さな森があったり高速道路の横には大きな木が並んでいたり。初めての発見でした。

しかし、ボルネオ島、サバ州の州都で私は信じられないことをしている人を見ました。朝早く数人の団員と市場へ出かけた時のこと、私は魚の臭いが嫌いなので外で待つことにしました。そこは、もちろん海がすぐそばで、目の前には水上ハウスがあり、沢山の生ゴミが海に浮かんでいました。すると小さな子供がその中へ入って行きます。

私は、初めその子が何をしているのかわからず、しばらく見ていました。すると大きなゴミ袋の中に、空き缶やまだ食べられそうな生ゴミを選んで入れているのです。その子の体を見ると、何年もお風呂に入っていないみたいで洋服はぼろぼろ。私はその子を見てかわいそうとしか言いようがありませんでした。

このような衝撃的な事があり、村ではどんな事が待ち受けているのか喜びと不安いっぱいの中で村へと向かいました。私がお世話になるサリマンドゥ村へ着くと、村の人になりきった協力隊員と村の人が出迎えてくれ、昼食からごちそうでした。それからすぐ四つのグループに分かれ、協力隊の仕事の手伝い。私は、稲刈りを手伝いました。村では、まだ機械はなく、手で刈り、もみは竹や金網の台で打って落すといった全部手作業。私は三十分位でとても疲れましたが、手作業だからこそ味わえるものを発見しました。それは、この農作業をしながら、親と子供達とのコミュニケーションがとれるということです。農作業を通して親と子が一緒に労働することによって何か共通のものが味わえると思いました。私も

子供達に日本語を教えたり、またマレー語を教わったり、とても楽しいひとときでした。



やっとホームステイ先のお母さんと対面。それまでなんとなく落ち着かず、ドキドキがとまらなかったけどナシアお母さんを見たら何だか安心できました。よし、がんばるぞという思いと、喜びで私の顔はにこやかに笑っていたような気がします。これからが本当の研修の始まり。

家に着くと私達の部屋にはろうそくがたててありました。なるべく明るくなるようにとの配慮でしょう。それだけで私達にとっても気を使ってくれていたことがわかりました。家族の人達は、みんなニコニコして私をすぐに受け入れてくれました。お母さんは、いつもは出さない鳥肉や魚などをだしてくれて、”おいしい、おいしい”って言って食べると、とてもうれしそうな顔をしていました。

朝は、三時ごろから鳥の鳴き声が聞こえ

はじめ、こどもたちがドタバタする音、お母さんが朝食を準備する音、にぎやかな朝の始まりです。一日目の朝は、こんな音で

何回も目が覚めました。二日目なんかいびきをかいていたそうです。そして私達が起きるころ（五時半ぐらい）には、外は明るくなっていて朝食の準備もできるころです。いつもは七時半ごろ朝食をとる私にとって、初めての経験でした。サリマンドウ村での生活は、何

をとっても初めての体験ばかり。たとえばお風呂、お風呂は体にサロンを巻き、水あびをするだけ。私の家は道路沿いで誰からも見えるような所です。家の中からは、みんなが見ているし……。一日目はとても恥ずかしかったけど二日目からは、家の人達と話しながらの水浴び。水は最初は冷たく感じたのですが、後からはそれほどありませんでした。そしてトイレ。夜、トイレに入ろうと思ったのですが、一平方メートルもないぐらいの広さの中に鶏とヒヨコが眠っていたのです。結局その夜は、びっくりして怖くて入れませんでした。村の人はちり紙を使わず左手で拭くのだそうです。水を流しながら……。日本とは全然違う生活習慣。サリマンドウ村では、生活習慣の違いや、水の大切さも学びました。

サバ州に派遣されている協力隊員の方々やサリマンドゥ村で頑張っている隊員の方々の話を聞いたり、質問したりしていくうちに私は自分のまちがいに気がきました。隊員の方々は、口々に「私達は現地の人に全てを教えるんじゃない。ヒント（アドバイス）を与えるだけ。あくまでも主役は現地の人なんだから。自分一人突っ走ってはダメ。」というように言っていました。私は今まで協力隊員が現地の人に指導すれば、その通りに従ってくれるものなんだと心の中で思っていました。しかし、そうではないのです。ボランティア活動だと教えても、金はないのかなどと言われるそうです。もし私が協力隊員だったら、水も電気もないところで生活できるでしょうか。

私の夢は、医者になってアジア・アフリカで協力隊のような活動をすることです。世界は一つと言われていますが、こうしている間にも、世界のどこかで人が死んでいます。食べ物があったら、薬があったら、まだ生きられる人達がたくさんいるはずです。いつか本当に”世界は一つ”と呼ばれる日が来るのを期待しています。

私には、二回目のマレーシア訪問でしたが、今回は八日間という短い期間での研修でいろいろな事を体験し、いろいろなことを学び反省させられ

ました。そしていろいろな方々と出会えました。結婚式ぐらいにしか食べない水牛を食べさせてくれたサリマンドゥ村のみなさん——。帰る時、涙を流して私を抱きしめてくれたナシアお母さん——。本当に心からやさしく接してくれた家族——。絶対忘れません。また、弓場団長をはじめとした団員のお兄ちゃんお姉ちゃん、私に何かを与えてくれた方々とめぐり会えたことを一生忘れません。この事業が第二回、第三回・・・とずっとずっと続くことを願っています。そして第一回目の団員として誇りを持ちたいです。これからは、もう物の豊かさだけでは、本当の幸福は、味わえないと思います。あの村人のように、生活の貧しさを感じさせない素朴さと明るさを忘れずに生活していこうと思います。またいろんな人達との再会を期待して、私自身がんばりたいです。”最後に、「本当に素晴らしい出会い」をありがとうございました。





# 私のマレーシア体験記

山口正也

(市来農芸高等学校 2年)

3月27日(水)

朝早く家を出て、国際交流プラザへ行った。

国際交流プラザへ着くと、団員のみんなが来ていて3月9、10日の事前研修で友達になった顔ぶれを前になつかしいものを感じた。そして、結団式。弓場団長をはじめ、この事業に関係、協力してくださった方達から激励の言葉をいただきとてもうれしく思った。やはり自己紹介は緊張して思うように言葉が出ず、とまどってしまった。しかし、私がこの事業に参加できるという喜びと意気込みは伝わったと思う。

さて、いよいよリズムバスに乗り鹿児島島空港に行った。飛行機に乗って福岡に行き、福岡からマレーシアの首都クアラルンプールへ向かった。鹿児島～福岡間は短かったが福岡～クアラルンプール間は非常に長く感じた。

海外に出るのは初めてなので飛行機の中で不安と希望が入り混じっていた。クアラルンプールへ着いた時、香りが日本と違っていたので、マレーシアに来たのだなと思った。それからバスでホテルへ行き、シャワーを浴びてすぐ寝た。今日を含めて8日間充実した日々が送れるよう自分なりに努

力していこうと思う。

3月28日(木)

朝6:30起床、夜が遅かったので十分睡眠がとれなかった。

朝食をすませクアラルンプール空港へ行った。クアラルンプール空港へ行く際、私は驚いた。横断歩道が一つもないのだ。弓場団長から「マレーシアでは歩行者より車が優先である。」と教えてもらった。それにバイクに乗っている人は上着を反対に着ていた。風の抵抗を考えてのことだろうか。それにしても一番驚いたのは日本の企業の看板の多さだ。私が目についたのは、ほとんどが日本の企業の看板だった。クアラルンプール空港からコタキナバル空港へ着いた。バスに乗りホテルへ行き、少し休んだ後、制服に着替えて領事館表敬に行った。領事に私は「複合民族国家の問題点はないのですか。」と尋ねたところ、「やはり問題点はある・・・」といろいろためになる話を聞かせていただいた。領事館表敬の後、協力隊の事務所へ行き、マレーシアの派遣隊員について話をしてもらった。ホテルへ帰り、夕食は青年海外協力隊員の方達にウェルカムパーティをしてもらった。明日

(3/29)からのホームステイは大変じゃないかと思わせるような話とか、どうして隊員になったのかなどいろいろ興味のある話をしてくれた。隊員というのとはこんなおもしろい人ばかりかと思うほど楽しい一時だった。

その後、シャワーを浴びて明日からホームステイでどのようなことがあるのかと不安と期待に胸をふくらませながら寝た。

### 3月29日(金)

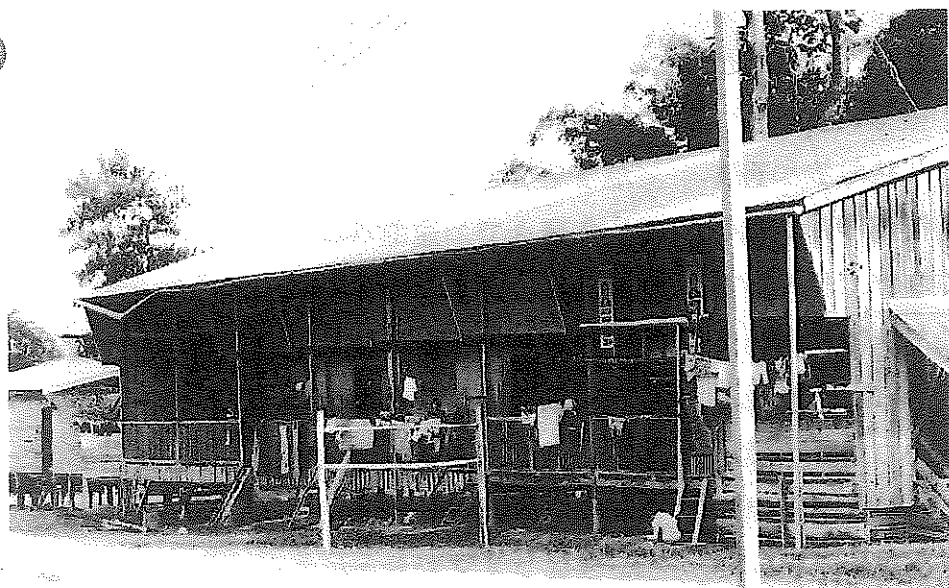
7:50起床。朝食を済ませバスに乗り込み、いざサリマンドゥ村へと出発した。バスの中で「ホームステイ先はどういう所なんだろう。」と不安が期待より強いようだった。多分、昨夜の青年海外協力隊の方が行なってくださったウェルカムパーティの時、不安になるようなことを聞いたからだと思った。途中、川で水浴びをしている子供達、泥の中に入っている水牛などを見た。

やっとサリマンドゥ村だ。村落開発研修センターで昼食をとった。さっそく右手でごはんを食べた。思っていたより水分がありおいしかった。その後、協力体験として各班に別れて作業を行なった。私は湊原君と家畜飼育の担当であった。隊員の野村さんに連れられていろいろな物を見学させてもらった。鶏の飼育小屋の整備を中心に畜産指導の活動をしているそうで、野村隊員は「(鶏の飼育小屋の整備は)まだ出発したばかりだが、今から期待できる。」と言っていた。その後、村の青年達とサッカーをして遊び、汗だくになりながらも一生懸命やり本当に楽しくてたまらなかった。村の青年達は「うまいな。」と驚いてしまった。

村落開発研修センターに戻り、村人との交歓パーティがあり、バナナのてんぷらのような物もあり、おいしいと思った。

交歓パーティも終わり、ホームステイ先の家へ車に乗っていった。私と寺師君はロ

ングハウスでホームステイすることになっていた。電気もなくてランプでの生活だった。初め家族の人と何を話せばよいかわからず困ってしまったが、寺師君がランプに頭をぶつけたことで緊張の糸がほぐれ、子供達と一緒に話をした。マレー語はよくわからなかったが、英



語がわかる子がいてその子に英語で話し、家族の人に伝えてもらった。鹿児島島のパンフレットやお土産を渡すととても喜んでくれて、私も本当に嬉しくてたまらない気持ちだった。こうしてサリマンドウ村での一日目が終わったわけだが、ホームステイ先の家族はとても人柄が良く親切で、嬉しく思った。

### 3月30日（土）

朝早くからジョナリンさん一家は起き出し音楽をガンガンかけていた。私はそのボリュームの大きさにびっくりしながら起きた。昨日までの朝とは違い、疲れがないさわやかな目覚めだった。「スラムット パギ」というと「パギ」と家族がみんな答えてくれる。今まであいさつというものをして、これほど嬉しく思ったことはなかった。顔を洗い、朝食には焼そばに似ている食べ物を食べた。予想以上においしくておかわりをしたらジョナリンさんが喜んでくれた。その後、稲刈りへ出かけた。たんぼに行く途中でいろいろな人とすれ違い、みんなとあいさつをかわした。

稲刈りはジョナリンさんと私たちと子供達の6人でやっていたが、後から20人ぐらいの人達が応援に来てくれた。多人数でやったので早く終わり、私たちはジョナリンさんに連れられて闘鶏を見に出かけた。闘鶏は初めて見たが、結構迫力があつた。

家へ帰り、昼食をとった。とうがらしをすりつぶした辛い佃煮のようなものがおい

しくてたくさん食べた。

昼食の後、自分で洗濯をしていたら子供達が集まってきて皆で手伝ってくれた。16歳のサミダという子が一番親切にしてくれた。「私なら自分の物を洗うのもいやだと思うのに、この村の子は感心だな。」と思った。洗濯も終わりひと休みしていたら、ゴム園に行くということで車に乗り込み、3年もののゴムの木を見てきた。こうして今日の日程も終わり、夕食を済ませ、子供達と剣道の真似をしたり、マレー語を教えてもらったり楽しく過ごして寝た。

### 3月31日（日）

朝早くからの音楽で目が覚め、村の生活にも慣れて、今日はハイキングということでウキウキした気持ちだった。

車に乗って隣村まで行ってから、山を登り始めた。初めのうちは楽だろうと思っていたが、歩いて歩いて目的地に着かなくて、何度も休憩をとりながらやっと着いた。その時の嬉しさはたまらなかった。村の青年達と共に元気よく川を滑り泳ぎ、本当に楽しくて、ここまで登りつめた苦しさがうそのように思えた。帰りは行くときよりも楽々で、途中パイアを子供達が取ってくれて、すごく甘くておいしかった。

昼からは稲の脱穀を少し手伝い、自分達で脱穀機のカバーを作り、実際に使ってみた。結構便利で、私たちとしても満足感というものがあつた。

夜はサリマンドウ村の人々がサヨナラパ

ーティをしてくれて、昼につぶした水牛を食べさせてくれた。少し食べたが、ちょっと生臭かった。団員は皆自分の持ち技を披露したが、その中で私と寺師君は剣道の型をやり、結構受けたようでやって良かったと思った。村の人々はリズムカルなバンド演奏や大変かわいらしい民族舞踊をしてくれた。写真を村の青年と一緒にとったりして楽しい一時だった。

その後、ジョナリンさんの家に帰り、ホームステイ先での最後の夜となった。



#### 4月1日(月)

朝早く起き、マンディをして食事を取った。ジョナリンさんの家族はいつものように陽気で音楽をかけて歌っていた。子供達は月曜日ということで学校があるらしく、私たちが起きた時にはもう制服に着替えていた。私たちを迎えに車が来てジョナリンさん夫妻も乗って村落開発研修センターへ行った。車の上で、サリマンドゥ村で過

した三泊四日の思い出が走馬灯のように駆け抜けていった。初めて家に行き何を話せば良いのか迷ったこと、稲刈りをしたこと、子供達と楽しくほがらかに過ごした日々のこと、何もかもが新鮮で、心から弓場団長を初め、OB会、この事業を行なうに当たって協力してくださった人達に感謝の気持ちで一杯だった。

気がつくともうセンターの前。天気は雨、まるで私たちと村人との別れを惜んでいるかのようだった。バスに乗り込む前、

ジョナリン夫妻が泣きだして、私も「さようなら。また会いましょう。」と涙をこらえてあいさつをしたが、ジョナリン夫妻が泣いているのを見てとうとう一緒に泣きだしてしまった。

ホームステイが始まる前の不安だった気持ちは何だったのだろう。この3泊4日は、私は楽しく

てたまらなかった。このままサリマンドゥ村に残りたいとも思った。しかし出会いがあれば別れがある。仕方がないと思いながらバスに乗り込み、流れる涙をこらえながら精一杯の笑顔でほほえんで手を振った。ジョナリンさんも一生懸命手を振ってくれた。本当にすばらしい人々、すばらしい村だったと思う。

こうして、サリマンドゥ村を後にした私

たちは、次にティナンゴール村のロングハウスを見学した。私もホームステイでロングハウスに泊まったが、規模の大きさにびっくりした。一棟のロングハウスに25世帯という大規模なものだった。それが3棟あるのだから「すごい。」の一言であった。ロングハウスの外には鶏や豚などの家畜を飼育しており、日本のものより出荷時期が短いことに気がついた。しかし水が不足しているので衛生状態が不十分であるという問題点があった。

その後、サバ林業開発公社(SAFODA)を訪問して、アカシア・マンギウムの植林状況を見学した。この品種は成育が早く、また植林されたところの土の状態を良くするという利点があるとのことだった。

クアラルンプールに戻り、久々にベッドで寝ることができた。

#### 4月2日(火)

モーニングコールで目が覚め、昨日までは子供達が起こしてくれたんだよと思っていた。朝食を済ませ、バスで日本語教育をしている「アラムシャー」という、中学1年から高校2年生までの学校へ行った。日本語教育を受けている生徒達は日本語がうまく、私たちは高校1年生と一緒に話をした。サリマンドゥ村ではなかなか話が合わなかったの、日本語で質問をされ、日本語で話ができるので嬉しく思った。生徒達はHOUND DOGの「フォルティシモ」を歌ってくれて結構うまくてびっくりした。私た

ちもマレーシアの代表的な歌を歌った。さすがはエリートを集めた学校だけあって生徒も一生懸命な様子だった。

昼食を終えた後、染め物を作っているところ、鍾乳洞、錫の工場等を見て回り、ホテルへ帰った。夜は中華料理店へ行き、みんな死に物狂いになったみたいに食べた。今日でマレーシア最後の夜だ。早いものだと感じた。

#### 4月3日(水)

さあ、今日は日本へ帰る日だ。朝食を取り、空港へ行った。日本へ向かう飛行機の中で早かった8日間の思い出が頭の中をめぐっていた。不安と希望を持って日本を飛び出した7日前のこと、ホームステイで現地の子供達と一緒に遊んだこと、隊員の方の話を聞いてためになったこと、いろんな事が考えれば考えるほどよみがえってくる。そんな事を思っているうちに福岡に着いた。久しぶりの日本で、何やら嬉しいやら悲しいやらの状態で、空港のレストランで日本食を食べて、マレー料理もおいしいが、やはり日本の料理にはかなわないと実感した。その後、本屋に行き、日本語の本を見るのが嬉しくてたまらなかった。鹿児島空港へ着くと父母をはじめ、関係者の方が大勢集まっていた。そして解散式があり、この事業の幕を閉じることになった。この事業に参加できたことは本当に嬉しいことであった。家に帰る車の中で父達に思い出をたくさん話して聞かせた。

# 7泊8日の奮闘記

関 真知子

(祁答院中学校 2年)

## 3月27日(水)

とうとう、待ちに待った日がやってきた。マレーシアってどういうところだろうか。ホームステイ先ではどんな生活をするのだろうかなど、たくさんの不安を胸に、県国際交流プラザに集合した。最初に結団式をした。いろいろな人のあいさつがあり、一人ずつの自己紹介があった。自己紹介はマレー語で、ということだったのでとても緊張した。

結団式が終わると打ち合わせを少しして、空港へバスで行った。空港に着くと、家族に見送られて福岡へと向かった。そして、福岡から国際線でマレーシアへと向かった。はじめての国際線なのでとてもうれしかった。途中、とてもおなかがすいて機内食が出たときはとてもうれしかった。

飛行機でマレーシアまでの長い時間、私は、眠ったり窓から見える景色を見たり、これから行くマレーシアのことを考えたりしていた。「マレーシアっていったいどんな人がいて、どんな風にくらしているのだろうか。本や写真で見るんじゃなく、実際にこの自分の目で見て触って、... いろいろなことが学べればなあ。」と思った。

いよいよ、マレーシア、クアラルンプー

ル空港に着陸という直前目にしたクアラルンプールの夜景はとても美しかった。空港に着くともうそこはすごく暑くて、バスに向かう途中目にした人達もさまざまな人種で、「もうここは日本じゃない。」と実感した。ホテルに着いたのはもう夜11時すぎで、とても遅かった。

何はともあれ、これから8日間、どんなことが待ちうけているのか、7日後に日本に帰るときに、代表として胸を張って帰ってこれるように、体に気をつけ、がんばろうと思った。

## 3月28日(木)

6:00に起き、6:45から、ホテルで朝食をとった。ホテルの人は、とてもいい人たちだった。食べ終わると、各部屋で準備をすませ、バスでクアラルンプールの空港へと向かった。途中、刑務所の前を通った。まわりの塀に、絵が描いてあって、かっこよかった。でも、言われるまで刑務所だとは思わなかった。

空港に着いた。空港には、白人、黒人、黄色人と様々な人種の人々がいた。なかには、いろいろな民族衣装を着ている人もいて、びっくりした。しばらくは、そんな空港の中

を見ていたが、そのなかでもかわいかった白人の女の子たちと写真をとった。それから、二階にあがって、買物をしたりした。どじな私は、カメラと帽子を忘れ、空港内をダッシュした。

9:45に、クアラルンプールをあとにした。機上からは、すずの露天掘のあとなどが見えた。しばらくすると、大小さまざまな島が見えた。とても美しかった。

間もなくコタキナバルの空港に到着、バスでホテルに行った。ホテルで制服に着替え、領事館と、協力隊の事務所に行った。そこでマレイシア全体のことや、サバのことをいろいろ聞き、とても勉強になった。

ホテルに帰って着がえると、女子五人で水上ハウスを見に行った。車が多くて、車道がなかなか渡れなくて困った。水上ハウスの近くにはこわくて行けなくて、手前の方で皆で写真をとって帰ることにした。帰るとき、水上ハウスの人たちに私達が手を振ったら、ずっと振っててくれ、サリマンドウ村の人もこんないい人たちだったらいいなあと思った。

ホテルに帰ると、今度は、夕陽がきれいだということで、また、水上ハウスの所に行った。夕陽は結局見られなかった。

この日の夕食は、サバ州で活動している青年海外協力隊員の人たちに、ホテルの2階にある中華料理店でウェルカムパーティーをしてもらった。そこで隊員の人といろいろな話をして、とても興味をそそられた。料理もいろいろあり、おいしいフルーツも

たくさん出てうれしかった。

### 3月29日(金)

皆より早く6:00に起きて、5人で朝市に行った。すがすがしい朝を想像していたのに、むしむしして、すがすがしいとは決して言えない朝だった。市場には大きな魚や、見たことのないような魚などが並んでいてびっくりし、さらに豆腐も売っていて驚いた。

ホテルに戻って、セルフサービスの朝食をとったあと、ホームステイ先のサリマンドウ村に向けて、バスで出発した。途中、村によって買物をしたりした。でも私は、気分が悪く、何も買わなかった。

とても長い道のりを経て、水のない川を渡ったら、サリマンドウ村だった。センターに着くと、食事の準備がしてあり、おいしくいただいた。

昼食後、早速、海外協力体験活動をした。私は保健婦の仕事だった。村のグループの人達がポスターを描くのを見学し、私たちも少し手伝った。ポスター描きが終わるとちよつと自由な時間があったので、私はその間、子供達と、ふうせんや紙ふうせんで遊んだ。たくさん集まってきて楽しかった。

そのあとは、村人とのティパーティをして、ホームステイ先のナシアさんと対面した。4人子供がいるそうで、やさしそうな人だった。皆でおかしを食べて、自己紹介をした。それからナシアさんの家に荷物を持っていった。家の中に入ると、想像して

いた家より立派な家だった。4人兄弟と言っていたのに家には6人の子供がいた。私は皆に祁答院のパンフレットや、自分の写真などを見せて、知っている単語やボディーランゲージを使って、自分のことを話した。皆、いい人たちばかりだった。



夜、サロンという布をそのまま巻きつけてマンディをした。夜は、隊員の原田さんたちがリキという少年を連れてきた。話をしなかな楽しかった。眠ろうとすると犬の遠ぼえなどで眠れなかった。

### 3月30日(土)

朝の3:00ごろからにわとりが鳴き、床下でケンカをする声に一旦目が覚めたが、また眠って5:00ごろ起きると、もう、皆起きていた。みんな早起きでびっくりした。朝食はラーメンのようなものだった。

そのあと、7:30ごろ稲刈りに行くということで家の人について田んぼへ向かった。どこかその辺りだろうという考えで行ったが大きなまちがいで、実際とてもとても遠い所にあった。とげとげの柵を越えたりして、体力を消耗した。イズロンがたかさんのシートを持ってきて、その上にパマハパサンというもみ落しの道具をおいて、もみ落しの手伝いをした。私は全々できな

くて、笑われてばかりだった。その次に別の田んぼへ移動して稲刈りをした。これは自分の家でもよくやっているのので、どうにかできた。でも暑さにまいってしまった。それを見てお母さんが、日かげに行きなさいと言ったので、その言葉に甘えて日かげで休んでいた。休んでいると子供たちが集まってきたので、私はおぼろ月夜を歌った。何曲か歌ったあと、今度は、持っていたシャボン玉をだしていっしょに遊んだ。子供達も喜んでくれて、うれしかった。

家に帰り、昼食を食べて、車に乗って教会に行った。そのあと長い時間をかけて海へ行き、それから洞窟へ向かった。川を2回渡って、山を越えたら、岩の洞窟だった。中は涼しくて気持ちよかった。夜は、私一人だったので、踊ったりして家の人と遊んだ。私が「祁答院音頭」を踊ると、かなり興味を示してくれた。村の踊りも踊って、とても楽しい夜だった。



### 3月31日(日)

6:30ごろ起きて、朝食を食べた。しばらくして迎えの車が来て、村落開発研修センターへ向かった。今日は楽しいハイキングとかピクニックとかいうみんなの言葉にだまされてしまった。本当は、山登りのようなもので、とても長い道のりだったのだ。軽がると登っていく村の人たちがとてもうらやましかった。私は、足のまめがつぶれたり、滑ったりで、もうさんざんだったが、村の人はそのたびに心配してくれた。

文句を言いながら登って疲れ切ったが、疲れた分、着いたときはうれしかった。そこは自然に出来た滑り台という感じで、すばらしかった。私達は暑くてたまらなかったもので、一気に水の中に飛び込んだ。村人たちは呆然と見ていたけれど、とっても気持ちよかった。村人たちと一緒に上の方から滑ったりして、さっきまでの疲れは一気にどこかへいってしまったようだった。帰りは、来るときのように疲れなかった。帰る途中で植物の説明をしてもらって、その植物をリキが持ってきてくれて、本当にやさしいなと思った。

午後は、水牛の解体を見せてもらった。水牛はよく見るとかわいくて、かわいそうだった。解体の途中で、女子は稲刈りに行くことになった。休憩のときにはスイカを食べたり、やしの実のジュースを飲んだりした。

5:00には、各家へ帰り、マンディをした。そうしてしばらく家族と話をし、

6:00にはセンターに行った。それから、ゆかたに着替えて、7:30ごろセンターの会場の方に行った。私達がひよっとこを持っていたら、村人たちがゆかたとお面に注目していた。

村人とのサヨナラパーティでは、村の民族舞踊やバンド演奏などを見せてもらい、私達も松崎君の歌「北国の春」をはじめ、剣道や空手、習字などを披露した。その後、昼に殺した水牛などの料理も出て、とてもおいしかった。食べ終わると、村人のバンドにあわせ、私達も村の人と踊ったりして、とても楽しい一時を過ごせた。その後、家に帰ってからも約2時間くらい踊ったので少し疲れたが、村人たちとの最後の夜、楽しく過ごせてよかった。

### 4月1日(月)

朝起きると、もうすでにマリソンやジュークミーなどが、お別れに来ていた。7:00ごろになると、皆、仕事があるということで、「さようなら」と言って帰っていった。いよいよ最後だなあと思い悲しかった。

7:30ごろ迎えの車が来たので、それに乗って、センターの方へ向かっていると、突然スクールにあった。初めてスクールを体験したので、びっくりした。

いよいよお別れというとき、お母さんが泣き出してしまっていて、私も泣きそうになってしまった。涙をこらえながら、皆にお別れをしてバスに乗ったが、乗った途端に涙があふれてきて、「別れたくない、ずっと

ここにいたい。」と思いながら、私達はサリマンドゥ村を後にした。

途中、ティナンゴール村で、ロングハウスや村の様子を見学した。そこでもその村の民族芸能などを見せてもらったりした。サリマンドゥ村とはちょっと違っていたので勉強になった。

その後、サバ林業開発公社を見学して、いろいろと説明してもらった。説明の中に、重要なことが数々あり、環境保護のことなど、いろいろなことも考えてあるんだなあと思った。

コタキナバル空港からクアラルンプールに移動すると、景色が一変して、同じマレーシアでも全然違うなあと思った。

その日の夜は、皆でチャイナタウンへ行った。夜市のようなもので、人で通りが埋まっていた。いろんな人がいて、ちょっと恐かったが、皆との団体行動だったので安心だった。チャイナタウンではいろいろなものを値切って買うのが楽しかった。お店お店で値段が全然違うので、みんな得をしたり、損をしたりした。帰りのタクシーが、私は4ドルだったのにみんなのは1ドルで、だまされた気分だった。

#### 4月2日(火)

7:30に起きて、朝食をとり、今日はクアラルンプールの学校訪問をした。ここでは第二外国語に日本語を選択できるようになっていて、たくさんの生徒が日本語を学んでいた。はじめ、校長先生のお話など

を聞き、協力隊員と生徒達が作ったビデオを見せてもらった。日本語で作ってあって、生徒の日本語も上手だった。その後、その生徒達の日本語の授業に参加して一緒に勉強した。日本で言う高校一年生で、今、日本語を学び始めて三年だそうだ。短い時間だったのに仲よくなれて、日本語での会話もはずんだ。

学校を後にして、バティック工場へ行って、工場内を見て説明を聞いたあと、お店でお土産をいろいろと買った。バティックは、とてもきれいでたくさん買ってしまった。その後昼食をとって、すずの工場へ行った。ここでは、すずのいろいろな製品をつくっていて、どれもが美しかった。日本語の案内人もいて分かりやすかった。そのすずのお店は日本の4分の1の値段だそうなので、私もお土産をたくさん買った。その後は、鍾乳洞へ行った。見るからにすごい階段だったのに、上り5分、観光5分、下り5分と言われとてもびっくりした。皆で頑張るって上ると、鍾乳洞はとっても大きくて、中にたくさんヒンドゥー教の神様が祭ってあった。降りるときは、しっぽの長い猿がいて、とてもかわいかった。

夕食を終えてホテルに帰り、23:00ごろから一番上の階に行って、クアラルンプールの夜景を見ながらみんなとサリマンドゥ村での思い出話に花を咲かせ、楽しい一時を過ごした後、部屋に戻りぐっすり眠った。

#### 4月3日(水)

いよいよ最終日。6:00に起きて、6:30には、朝食を食べ、7:00にはもうホテルを出発した。クアラルンプールの空港に到着してから、皆、各自買物をした。特にチョコレート等を買っていた。でもチョコレートのお店は、長い列ができていて、列に並んでお金を払ったところで出発の時間となり、そこだけでしか買物が出来なかった。そして皆で飛行機に乗り込み、クアラルンプールを後にした。またまた、長い長い空の旅をして、日本に帰ってきた。空から日本を見て一番に思ったことは、都市に緑がないということだった。建物がびっ

しり並んでいて、何か息苦しかった。

福岡空港でちょっとゆっくりして鹿児島へ帰った。福岡から鹿児島への旅は、とても短かった。空港に着くと家族が待っていて、ちょっとホッとした。そして、8日間、あっという間だったなあと思っていた。この間の体験を通じいろんなことを学び、体ごとぶつかって異文化を理解してくるとい  
う目的は果たせたような気がした。

最後、解散式で弓場団長の帰国報告を聞きながら、元気なまま帰ってこれて本当に良かったと思った。この8日間で学んだことや、体験したことを家族や友達に聞かせてあげようと思った。



# 我々は幸せか？

湊原 政彦

(鹿屋農業高等学校 1年)

事前研修も終え、出発の準備も万端整い、後は心の準備だけだ。言葉の壁や生活習慣の違いなど、多少の不安を感じていたが、やはり心は大きな期待にふくらんでいた。現地に到着したら、どのような出会いが待っているのか、どんな体験をするのか、協力隊員はどういった仕事をしているのかなど、脳裏には学びたい事が山積みしていた。

3月27日 いよいよマレーシアへ向け出発。初めて日本という小さな国から、広い世界へ飛び立つ気分は、なんとも言葉に表現できないものがあった。頑張らなければと自覚を新たにした。

飛行機のタラップを一步おりと、ムツと熱気におそわれた。とうとうマレーシアの地に足を踏み入れたのだ。さあ、始まりだ。僕が目も輝いた。

2日目 首都クアラルンプールから東マレーシアのサバ州に向け出発。マレーシアの空気にもいくぶん慣れてきた。ホテルで休憩した後、在コタギナバル領事館を訪問し、マレーシアの事情を聞いた。説明によると、マレーシアは複合民族国家であり、民族同志の争いも多少あるが、おおむね、国民は平和に暮らしている。1963年に独立し、マレー系、中国系、インド系の人

々がそれぞれの民族意識をもって生活しているとのことであった。

協力隊の事務所では、「協力隊の目的とは、なんらかの技術、知識を持った隊員が、そこに住む人々の文化を共有し、共に働きながら彼らの国造りに協力することである。また、日本はマレーシアにとって最大の貿易相手国、日本製の車が多い。逆に日本は木材を大量に輸入し、今では森林の破壊が進んでいる。もっと木材の節約や、植林を進んでやるべきである。」というような説明をして下さった。

夕方からは、ウェルカムパーティが開かれ、沢山の協力隊員が集まって下さった。隊員の人たちは、光り輝いており、自信にあふれている様子がかげえた。

3日目、サリマンドウ村へ到着。話に聞いていたより村は意外に開けている。マレーシアは熱帯で雨期、乾期がはっきりしている。そのため、家の作りは雨季に備え高床式で、床は日本式の縁側のように板張りである。壁は概ね板張りであるが、特に貧しい家では竹が張りめぐらされてあった。

昼食をとった後に、早速協力体験だ。家畜飼育について野村隊員が説明して下さる。家畜は放し飼いで、鶏、水牛、やぎを飼っ

ている。鶏の一部は、小屋に飼われており、野村さんが中心になり村人が小屋を作り、村人が経営をしている。村人にそこまでさせるのに大変苦勞されたらしい。村人たちは鶏などを小屋で飼おうと思わず、生まれたらそのまま放し飼いにしてしまうという習慣があり、その鶏が小屋の床下に入り、小屋の中の鶏に病気をうつしてしまうことを心配している。これからは放し飼いをなくしたいというのが目標とのこと。

この日の協力体験を終えて、いよいよ今夜から村人宅へのホームステイだ。僕のホームステイする家は、ジョミンさんという新婚さんのところだった。家は新築したばかりだが電灯はなく、ローソクやランプで過ごす。トイレは外にあり、簡易トイレのように一杯になると別の場所に作り替える。僕達のためにトイレトーパーが準備されていたが、他の団員のところでは紙がなく、大変困った団員もいたようだった。

水はとても貴重で、簡易水道が庭先にあったが、必ずしもひねって水が出るとは限らないのだ。風呂はなく、マンディ（水浴び）を近くの川で何回となくする習慣だ。煮炊きはガスでするようになっており、村の中のほとんど全部の家に備えてあったようだ。

食事は大変心配していたが、魚や野菜も豊富で、とり肉などおいしくいただいた。ジョミンさんをはじめ村人たちは何杯もおかわりする僕達のことを何より喜んでくれたようだ。味つけもよく、僕の口によく合

っていた。

ジョミンさん夫妻はいつもほほえみ、優しく僕等に接してくれた。いくら生活が貧しくとも笑顔は絶やさなかった。日本人は時間に追われて仕事に追われて、人間同士の付き合いも薄れてきたようでなんとなく人と人とのふれあいが少なくなっているようだが、サリマンドウ村の人達は時間には関係なく、日が昇れば起き、たんぼに出るというのんびりな生活を送っている。村全体が一つの家族のように強いきずなで結ばれているように感じられた。

マンディ（水浴び）に出かける時は、僕は水泳に行く気分だった。サリマンドウ村では、水は貴重で節水に心がけている。近くの小川で体を洗う。それが僕等にとっては楽しく貴重な体験であった。

3月30日、午前三時に起床。今日は断食にチャレンジすることになっている。ジョミンさんは熱心な回教徒で、断食中は日が昇っている間は飲み食い出来ないのも、この時間に朝食をとった。

朝まで仮眠をして、田んぼへ出て、まず刈りとった稲を運んだ。稲刈りは、陸稲なので、穂だけを刈りとる方法だ。不器用な僕には、至難の技である。子供たちは家の手伝いをよくし、家族の一員として一生懸命である。

日も高く昇り、じりじりと照りつけるなか、のどの乾きに苦しんだ僕達は、取りたてのヤシのジュースをいただき、その味は格別だった。生水を飲むことができない村

では、ヤシのジュースが水のかわりをしてくれる。そのおいしさに思わず「バグス！」と叫ぶとジョミンさんたちは大変喜んでくれた。「バグス」とは「good」の意味だが、どんなときにも使える便利な言葉だ。

それにしても、この村の人達は、笑顔絶やさない。まるで心が顔に表われている様だ。どんなに貧しくとも、貧しいと思わない強い精神力を持ち、必要意外の欲というものは持っていない。人のために一生懸命に尽くしてくれ、広い心を持ち、僕等に接してくれる。そういう態度は、日本ではあまり見ることはできない。言葉は気持ちを伝えるための道具にすぎないが、笑顔は、言葉の不安をかき消し、楽しい気分にしてくれる。西村隊員が話して下さった。「村人達は、一日数時間働けば生活できるが、日本は一日中働かなければ暮らしていけない。日本で言う幸せと、マレーシアで言う幸せとは少し違うような気がする。」確かに、よく考えてみると、日本はあまりにも物に恵まれすぎてぜいたくである。物に不自由なく暮らすことが本当の幸せではなく、貧しくても、働く喜びを持ち、楽しい生活ができる、それが真の幸せではないかと思う。そんな、村人の素朴で貧しいながらも一生懸命に生きている姿に強く心を打たれた。

広いたんぼの向こうには、高床式の家が見える。この村は五百人ちょっとの村だけど、人と会うたびにかならず何か話す。大人であろうと子供であろうと関係なく話す。

そういうところから大人と子供のコミュニケーションが生まれるのであろう。日本人は、人と会おうともあいさつさえしないことも多い。

夕方になり、少し涼しくなったころ、村人との交流の一つとして、サッカーをすることになった。試合は残念ながら負けてしまったが、村人はみんなよくまとまり、チームワークの素晴らしさに圧倒された思いだった。子供達は大変素直で、優しい心を持ち、何に対してもやる気を見せた。また、人なつっこい所も印象に残った。

3月31日、キヌモアリ溪流へのハイキング。村人達は、歩き慣れていてペースが速い。歩きながら回りを見ると、目に入るもののほとんどが新鮮に映った。マンゴー、ヤシなどの、熱帯地方にしかない珍しい果物もあった。

溪流には一時間程度で着いた。村人と私達は、洋服のまま水に入り、元気よく急流に乗り込んだ。子供も、大人も無邪気である。



午後からは、水牛の解体が行なわれた。村人達は年に一回か二回しか解体は行なわない。しかも、結婚式などの、めでたい時だけなのだ。この日は僕等のために水牛を一頭解体して下さった。僕等がこの村にきたことを心の底から歓迎して下さっているのだろう。この村人の真心に、僕はどうやって答えたらよいのかわからなかった。

昼食後は、協力体験として、西村隊員が試作した足踏み脱穀機の改良を行った。穂が飛び散らないように屋根をつける作業である。一時間ほどで完成し、早速たんぼに持ち込み、脱穀してみた。村の人たちと一緒に行った試運転の結果は大変上々で、西村隊員も満足気だった。僕の家も農業を営んでいるが、ほとんどの農家は機械化し、コンバインやハーベスターを使用している。でも、ここサリマンドゥ村ではまったく手作業で、ドラム缶に穂を叩きつける脱穀方法もあり、僕達も実際に体験してみたが、なかなか能率が上がらなかった。

サリマンドゥ村には4名の協力隊員が派遣されているが、一から十まで教えるのではなく、地域性や村人達の思考に沿ってヒントを与え、村人とともに努力していくとのことだ。この足踏み脱穀機も、村人達が自分から喜んで使うようになってはじめて本当に村人達の役に立つものになるのではないかと思った。

いよいよサヨナラパーティの夜がやってきた。僕等のために大勢の村人達が集い、村長さんの長時間に渡るあいさつがあった。

マレー語のできない私は、首をかしげながらも聞いていたが、僕達を歓迎して下さる気持ちがじわじわと伝わってきた。ちなみにこの国では演説の長いほどパーティが盛大であると後で聞かされた。

いろいろな出しもので交流は深まり、なかでも村の子供達が民族衣装をまとい踊ったダンスは、とっても可愛らしく印象的であった。僕達も浴衣姿でおはら節を踊ったり、マレーシアの代表的な歌を、覚えてたてのマレー語で披露した。村人には、大受けで喜んでもらった。この歌はいまでもなつかしく、時々口ずさんでいる。

多くの村人と接し、言葉の壁を乗り越え、農作業や生活をともにした。三日間の滞在であったが、家族の一員として迎えてもらったことが何よりの喜びであった。僕達が異文化の中でスムーズに生活できたことは、村人と僕達の心と心がつながり、目に見えない「きずな」で結ばれた証だと誇りにさえ思えた。

お別れの朝、固い握手を何度も交わし、こみ上げる涙を懸命にこらえ、笑顔で別れを告げた。「もう一度絶対にくるんだ。」と自分に誓った。「今度はきっと協力隊員となって再会しよう。」自分の胸に言い聞かせた。語学のあまり得意でない私は、目的を達成するためにも、今後もっと語学に力を注ぎ努力する覚悟だ。

僕達は、人なつっこく、思いやりがあり、素直で純粋なサリマンドゥ村の人々の心に触れることができ、国は違っても同じ人間

として共に感じあえる温かい心のぬくもりを知った。

今度の協力体験を終えて、このような素晴らしいチャンスを与えてもらったことを、とてもうれしくありがたく思った。以前から国際交流に関心を寄せていたので団員の一人として決定通知を受け取った時は、夢のようであった。思いもかけぬ様々な体験ができたこと、多くの人々と出会うことができたこと、あれこれ思い出すと限りない幸福感で一杯だ。

7泊8日で学んだり、体験したことを大切にし、これからの僕の人生の一つのステップとして、生かせるように頑張ります。

OB会の皆さん、国際交流協会のみなさん、そして支援する会のみなさん、本当にお世話になりました。ありがとうございました。





# 体験を通して学ぶ

小西 恵子

(鹿児島純心女子高等学校 2年)

澄みきった青空のもと、熱帯植物が緑いっぱい生い茂り、広大な田園地帯には稲が豊富に実っている。人影は少なく、見かけるのは大きな体をのっそりさせて草を食べている水牛とにわとりだけである。

ここは、サバ州コタキナバルから車で東へ約4時間。のどかで自然の豊かなサリマンドゥ村である。これから、今回わたしたちの目的である海外協力体験とホームステイが始まるのである。

さっそくバスを降り、村を見渡した。道際には、木で造られた高床式の家やロングハウスが建ち並んでいる。けっして立派で丈夫そうな家と言えるものではない。同時に、私の脳裏に浮かんできたものは、電気と水道のない生活である。三日間本当に我慢できるのだろうか、一抹の不安を胸に抱いた。

現地で活動している隊員の方に、村の状況や活動内容を説明していただくため集会所へ入った。そこには、おいしそうな昼食が準備されていた。緊張のあまりに昼食をとっていないこともすっかり忘れていた。目の前に出された御飯は、なんと木の葉に包まれ蒸されたものであった。おかずは魚が主で全部カレーのスパイスが使われてい

た。勿論、辛い。スプーンは用意されていたが、それは使わずに、事前研修で練習したように手で食べることになった。はじめは、御飯はくずれないし、つかめないと苦労したが、食べていくうちにコツを覚えておいしく食べることができた。食事の間に、村落開発普及員の金子隊員から、村の状況と各仕事の活動内容を説明していただいた。その中で、現在ではほとんどの家庭に電気や水道が普及しているということを知り、不安の一部は消え去った。私は保健婦の仕事を担当することになっていたのも話しに耳をかたむけた。保健婦の仕事は、村人の健康管理の指導をおこなうだけでなく、衛生面にも協力活動をおこなっているとのこと。衛生活動といってもどんなことをおこなっているのか。これから体験することで学ぶことができるのか。内心とてもドキドキしていた。おなかをいっぱい満たし説明が終わったあと、みんなそれぞれの協力活動にたのしみと不安をもってわかれていった。

保健婦の仕事は、村人の健康管理の指導にあたるだけだと思っていた。だから、今日の活動体験は各家庭をまわり健康確認をするのではと、期待していた。しかし、金

子隊員の説明にもあったように衛生面においても活動をおこなっていることを知った。

私は、隊員でただ一人の女性井上郁子隊員について、保健婦としての活動内容等を説明していただいた。今回の体験には、村人から選ばれ井上隊員とともに保健活動を行っている保健委員の方も参加して下さった。

まず初めに、現在、ゴミ焼き場の設置に取り組んでいるということで近くまで見学に行った。井上隊員は「今まで、各家庭から出るゴミは床下や庭に埋めて始末していた。しかし、それではまた掘りかえされている。生活環境に対して衛生的に悪い影響を与えるので、ゴミ焼き場を設置して処理をするという方法を考えた。」と話してくれた。その後、集会所へ戻り“ゴミ焼き場設置”と“ゴミは焼いて処理しよう”という掲示用のポスターを作った。保健委員の方が率先して製作していた。わたしたちは、みんながこのポスターを見て少しでも協力的になって欲しいと願いを込めて一文字を書き入れた。出来上がったポスターはうまくできていた。みんなの願いを込めて作られたポスターは、これからの村の生活により答え

を出してくれるだろう。

雄大な自然を保護していくためにも、まず人間の生活している足もとから見つめ直すことが大切だと思う。

今、日本ではゴミの出量が多いということで、環境問題として取り上げられている。わたしたちは、ゴミがでるのはあたり前と考えて生活してきた。しかし、この村へきて自分たちの日常生活がどんなに発達しているかを知ることができた。産業が発達すれば、本当に楽な生活を楽しむことができる。でもその裏には、少しずつ自然環境破壊や水質汚濁といったような問題がおこっている。それをはやく食い止めるためには、これからの時代を担うわたしたちの世代が関心を持って、考えていく必要があると思う。

この体験を通して、わたしの知らなかった世界を一つ知ることができた。そしてゴ



ミについて衛生的に悪いとか自然破壊につながるなど、今まで考えたことのなかったものを、深く考え直してみるいい機会であった。この村で、活動している隊員の姿からは、いきいきさを感じた。わたしは、時間に追われているだけの毎日は送りたくはない。 わたしはこれから、福祉の勉強をして将来、世界で自分の才能をいかせる青年海外協力隊員となることを夢見ている。 今回のことをステップに、これからの生活に役立たせ、若い人たちに協力活動を知ってもらいたいと思う。

みなさん、本当にありがとうございました。



# 異文化体験の中での発見

寺師 慶太

(鹿児島中央高等学校 1年)

約十倍という難関を突破し、マレーシア派遣団の一員として選ばれた時なんとも言えない感動で一杯だった。

中学生の頃から僕は漠然とではあったが海外に興味を持ち始め、高校に入学してからはよりその気持ちは、より具体的になっていた。しかし、海外に行こうにもそんな経済力も暇もあるわけではなく、自分自身高校時代に海外旅行は不可能と思っていたから喜びも大きかった。

事前研修で英語・マレー語の語学演習、現地事情説明があり、実感が湧いてきた。又、他の団員とも出会い、マレーシアでの生活を想像すると胸が弾んだ。

## 3月27日(水)

福岡空港から約6時間30分のフライトを経てマレーシアの首都クアラルンプールの町の灯が見えた。長年の夢だった海外の灯を見た時、僕は踊りだしたいような気分だった。他の団員も目を輝かせて必死になって飛行機の窓から夜景を見ていた。みんなの感激が自分にも伝わってきてとても嬉しかった。

クアラルンプール国際空港に飛行機は無

事着陸し、この日はフェデラルホテルに直行だった。空港を出た途端、ムッと来る熱帯特有の熱気、マレー系・中国系・インド系の人々。そしてイスラムの信者らしき女の子の人などを見ると、アーもうここは日本ではなくマレーシアなんだと妙に実感した。これからの一週間僕達はこのマレーシアでどんな人と出会い、どんなドラマが生まれるのだろうかと思うと、すごい期待感で一杯だった。

バスに乗り込み、ホテルまでの約30分間僕は町の光景を一生懸命になって見た。その中で日本企業のネオンを数多く見つけた。改めて日本の経済力の強さに驚かされた。バスはフェデラルホテルに到着した。この日は長旅の疲れもあり又、明日からのハードなスケジュールに備え、すぐに床についた。

## 3月28日(木)

6時30分に起床して朝食だった。ホテルのウェイトレスと少し英語で会話し、簡単な英単語であったが通じたときとても嬉しかった。今日もやるぞと意欲満々にフェデラルホテルを出発した。

今日はマレーシア半島にある首都クアラルンプールから東マレーシア（ボルネオ島）のサバ州都コタキナバルへのフライトだった。

約2時間30分経て、コタキナバルへ到着した。僕達はホテルに荷物を置いた後、すぐに夏の制服に着がえて領事館を訪問した。領事よりいろいろとマレーシアの事情を説明していただいた。その中でも、「我々日本人はマレーシアのような複合民族国家に違和感を抱きがちだが、むしろ世界的に見れば日本のような単一民族国家の方が珍しい。」という話が印象に残った。協力隊事務所も訪問した。

この日の夕食は中華料理で、サバ州で活躍されている青年海外協力隊員の方達と席を共にした。料理の方もおいしかったが隊員の方達ととても話が弾んだ。みんな明るくておもしろい人達だったが、考え方がしっかりしていた。自分の嬉しかった事、苦しくて挫折しそうになった事などを沢山話してくださり、とても楽しかったし、自分の生き方に参考になるような事も沢山あった。この出会いを大切にしたいと思った。

### 3月29日（金）

昨日の夕食会での思い出を後にし、ホテルを出発した。今日からいよいよサリマンドゥ村でのホームステイが始まる。期待も大きかったが不安もかなりある。日本の恵まれた生活と異なり村の生活は貧しいと、事前研修会で聞いていたからだ。

州都コタキナバルからサリマンドゥ村まで約150km、鹿児島市からだいたい八代市までの距離となる。しかし、日本と異なり道路も舗装されているわけでもないので、かなりの時間を費やした。車内から外を見ていると、コタキナバルで見かけたビルや鉄筋コンクリート建ての家が、山奥に入っていくにしたがい高床式の素朴な家になっていく。何だかタイムスリップした感じだ。東南アジア最高峰のキナバル山も見えた。

そしてやっとサリマンドゥ村へ到着した。長くバスにゆられたためか、みんな疲れ気味である。村落開発研修センターで早速昼食を右手で食べた。疲れていたためあまり食欲はなかったが、それでもナシ（御飯）だけは2杯食べた。このサリマンドゥ村で活躍されている4人の青年海外協力隊員の紹介があった。髪はボサボサで、ヒゲも伸び放題という隊員の方達にたくましさを感じた。昼食後、僕と大浦地君は土木施工の原田隊員について水道パイプの点検作業をした。この水道は山の溪流から協力隊員がずっとビニールパイプをつないできて水を運んできているそうである。そして各戸にパイプをつなぎ、生活の為に欠かせない水を供給しているのである。以前は村の生活は雨水に頼るのみであったが、簡易水道が出来てから村の生活水準も数段向上したとのことだった。ここに青年海外協力隊の活動がいかにか村人の生活に密着しているかを見た。人並み以上の根気強さと想像力

がなければ協力隊員は努まらない事を思い知らされた。

この日の夜は村落開発研修センターでホームステイ先の人との対面式があった。僕と山口君はジナリンさん宅にお世話になる。ジナリンさん宅は、ロングハウス（6所帯が入居している高床式長屋）にあり、経済的には村の中でも貧しい部類に入る。僕と山口君も一抹の不安はあった。ジナリンさんの第一印象は無口な人であった。しかし表情は柔らかく人の良さがしっかり顔に出ているような人である。対面式が終わった後、団員はそれぞれの家へと向かった。いよいよである。

家に着くと、早速子供達が集まってきた。ジナリンさん宅には電気がないために、夜は石油ランプを吊るす。僕は日本にいる時もかなりドジであるが、それはサリマンドゥ村でも同じだった。吊るしていたランプに自分の額をぶつけたのである。かなり痛かったのだが、みんな僕のことを心配してくれ、介抱してくれた。とてもうれしかった。そして子供達に日本で買ったお土産を配り、写真などを見せて一生懸命にマレー語と英語で説明した。子供も大人も好奇心一杯で色々と質問してきた。僕達はさっきまでの疲れもさっぱり忘れて夜遅くまで語りあかした。

### 3月30日（土）

早朝よりガンガン音楽を鳴らしているのが目が覚めた。時計を見るとまだ6時30

分である。日本ではまずこういったことはないが、ここはサリマンドゥ村なのである。

しばらくして、ジナリンさんの長女で16歳のサミダが僕達を起こしに来た。髪が長くてきれいな目をした子である。「マカン」と言ったので朝食の準備が出来たのだなと思った。朝食は質素な物であったが、ぐっすり寝た僕達は食欲もあったのでガンガン食べた。ジナリンさん夫婦や8人の子供達とマレー語と英語のごちゃまぜで話した。しかし面白いことに僕と山口君は何故か言葉が通じているような気持ちになり、すっかりこの家になじんだ。

午前中は稲刈りを手伝い、村人20名位と楽しくやった。サリマンドゥ村のどこまでも青い空が僕達に活力を与えてくれた。かなりの稲を刈ったが不思議と疲れは感じなかった。この村の人々はみんなが一つの家族みたいなものだなあと感じた。

仕事を終わると体中が汗でびしょりで、僕と山口君は初めてマンディ（水浴び）をした。サロンを腰にまいて頭から思いっきり浴びる水は本当に気持ち良かった。汗を流した後はついでに洗濯にも挑戦した。サミダを初め子供達が10人ぐらい集まってきた。僕と山口君の下着を洗ってくれた。みんな本当に楽しそうで笑い声が飛び交った。僕も本当に楽しくて、こんなにもこの村での生活が楽しいものになるうとは思ってみななかったので、本当に子供達が可愛いくて仕方がなかった。

夕方になると今までのうだるような暑さ

が消えて、さわやかな風が吹き始めた。村の小学校の校庭で村の青年達とのサッカーの交流試合が行なわれた。僕たちのチームもみんながうまくまとまり、互角の試合となった。村の青年達の技術はすばらしく上手であった。僕達日本チームもそれに負けじと頑張ったので、ポロ負けはしなかった。青年達は気取った態度もなく底抜けに明るくて、心の広い人達だなあと考えた。とても仲良くなれて嬉しかった。

二回目の夜がやってきた。この日は時間的に余裕があったので子供達とゆっくり話す時間があった。ロングハウスなので他の家に住んでいる子もみんなジナリンさん宅へ来て泊まることになった。

子供達は小学校から英語を学ぶので基本的な英単語は通じる。特に長女のサミダは英語が得意で、高度な単語まで知っているのでそれ程会話には困らなかったが、マレーシアに来たからには僕達もなるべくマレー語を喋った方が彼らも喜ぶから、マレー語資料を見ながら僕と山口君は頑張った。子供達は僕達にマレー語と同時に現地語であるドゥスン語を何とか覚えさせようとしていた。サミダは英語・マレー語・ドゥスン語の比較対照図まで僕達に書いてくれて、彼らの熱心な心は確実に僕達の胸に響き、心の中に熱い感動を覚えた。僕達も日本語を彼らに教えてあげ、一生懸命に覚えてくれるようにとじていた。そして、僕と山口君は持って来た世界地図をひろげ、具体的に日本の位置と鹿児島島の位置を教えてあげ

た。そして世界各地の説明をした。彼らの食い入るような視線は日本の子のそれとは、全然違っていた。

ロングハウスのすぐ近くの家にもホームステイしていた大浦地君と橋口さんもロングハウスに遊びに来てくれた。橋口さんはリコーダーを吹いてくれた。夜、ロウソクの明かりだけが光る中で聞く音色はロマンチックなものがあり、僕はこの一瞬がずっと続けばなあと思った。一秒一秒をこんなにも大切に生きたのは初めてではないだろうか。

### 3月31日(日)

今日は村の青年達と山中の溪流を登るハイキングに出かけた。ごつごつと大きな岩の上を登って行くので疲れる。このハイキングには隊員の方達や村の人達も沢山参加してくれてとても楽しかった。

2時間ちょっと歩き、目的地に着いた。そこには天然の岩の滑り台があり、みんなとても楽しそうに泳いでいた。僕もとても暑かったので、一緒に楽しく泳いだ。村の子供や青年の人達とも楽しく遊べ、ここまで仲良くなれるとは思わなかったので嬉しかった。帰りには子供がパイナップルを採ってくれた。すごく甘くて夢中になって食べた。

夜はお別れパーティだった。村人達が300人も集まってくれた。僕達団員は各自の特技を披露した。僕と山口君は剣道の型を見せた。受けが良かった。村のバンドが様々な曲を演奏してくれて、とても上手

だった。サミダも歌を歌ってくれ、嬉しかった。

#### 4月1日（月）

朝から空がどんよりしていた。今日までの3日間は短いようであったが、毎日がいろいろな人との出会いがあり、内容はすばらしいものであった。

別れのとき、ジナリンさんとお母さんが涙を流した。みんな見送りの人は目に涙を浮かべていた。その時僕はこらえていた涙が止まらずに泣き出してしまった。感きわまる一瞬だった。そしてこの村の人々を一生忘れないと心に誓った。スコールが丁度この時降り、別れの涙のようであった。普段、神の存在など信じない僕だが、この時ばかりは神様に村人との出会いを感謝せずにはいられなかった。それ程僕はこの3日間を大切に過ごした。そして僕達は、サリマンドウ村を後にした。

こうして僕達は一週間の協力体験を終えた。僕の脳裏にはサリマンドウ村の人々と現地で活動している青年海外協力隊員の姿が焼き付いている。一週間の間に多くの隊員と出会った。どの隊員も自分の仕事に情熱を傾けている。みんな底抜けに明るく、自分の生き方に自信を持っているような感じさえ受けた。この明るさや自信・充実感というのはどこからくるのだろうか？僕は、多分自分の本当にやりたい事が出来るからだと思う。そして自らに挑戦して苦しいこ

と・挫折しそうになった時などをグッと耐えて、壁を乗り越えてきたからだと思う。

「もちろん発展途上国の人達のために、自分の技術を教えたいという願いもあるが、それ以上に、自分に対しチャレンジしたかったから協力隊に参加した。」ということ言われた隊員がいた。つまり青年海外協力隊というのは、自分の持つ技術を途上国の人々に伝えると同時に、自分というものに限りなくチャレンジする場でもあるのだ。そして協力隊というのは何も特殊な人達の集まりではなく、みんな普通の人なのだ。但し、自分の信念というものはみんな例外なく持っている。やりがいのある仕事だなあと思う。

また、サリマンドウ村の人達の笑顔も忘れられない。老若男女問わず、純粋な目を持った人々を、僕はいまだかつて見た事がない。子供達は人なつっこく、こっちがうるさいと思うほどいろいろと語りかけてくる。ケンカもなく、村全体が一つの家族のようだった。声をかければ、必ず満面に笑みをたたえ、返事をする。このようなごくあたりまえの事が現在の日本で行なわれているのだろうか？日本人や欧米人の中には東南アジアやアフリカの国々に対して心の中で確実に見下げている人もいる。しかし、それは経済的な・物質的なものが勝っているだけであって、精神的に豊かなのは明らかに彼らの方かもしれない。何か、経済大国になったが故に日本人がなくなってしまった大切な宝を、彼らはもっているように僕



には思えてならない。

ある引率の人が帰国した時こう言われた。

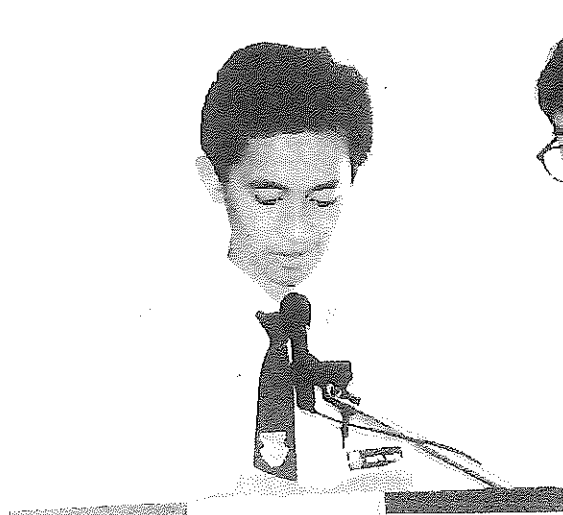
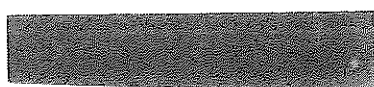
「サリマンドゥ村での寺師君の表情は日本でのそれと少し違っていたよ」と。自分でも気付かなかったが、僕は、3日間という短い間ではあったが、確実に村人のひとりになれたんだと思った。そして一番素直な自分がこの村で出せたんだと思った。本当に楽しい3日間だったが、考えさせられる部分も多かった。

僕は、将来、国際的な視野を持ったジャーナリストになりたいと思っている。具体的に言えば、世界各地に飛んでその国の持つ特色やそこに住む民族の姿・特性・日本人にないものなどを取材し、帰国後それをドキュメンタリーにして放送したいと思う。放送というメディアは人々にかなり強いインパクトを与える。言葉・習慣・肌の色の違いから生ずる違和感は厳然と存在すると僕は思うが、そのドキュメンタリーの中で、

そういったものを越えた、何か日本人と共通した線みたいなものを見いだして、それをみんなに訴えられたらと思っている。つまり、違いと共通点をうまく映像に引き出せたらと思う。今まで漠然とジャーナリストを目指していた僕だったが、今度の協力体験を通してその夢が確固たるものになった。

毎日自分を鍛え、苦しくても弱音を吐かずに毎日を大切にしていこうと思う。毎日の努力の積み重ねの向こうに夢の実現はあると思うから・・・。

最後になりましたが、弓場団長はじめ、この協力体験を支えてくれた人全てに「ありがとう。」と言いたいです。あのような経験は到底味わえないと思います。自分のこれからの人生に強い影響を与えたいと思います。この、自分にとって宝のような思い出を大切にしたいと思っています。本当にありがとうございました。



謝辞  
このたびは、  
ご協力いただき、  
誠にありがとうございました。  
また、  
ご迷惑をおかけした  
点も、お詫言  
い申し上げます。  
今後とも、  
どうぞよろしくお願い  
いたします。

# 本当の豊かさとは？

福永 由美子

(大島高等学校 3年)

3月27日(水)

今日は朝からずっと緊張していた。飛行機が離陸して初めて“あー今日はいよいよ出発なんだ。”という気持ちになった。一次試験から今日までをずっと思い出してみた。一緒に受けたみんなの顔が思い出された。多くの人の中から選ばれたのだから自分の思い出作りだけではいけないと思う。私達にはない何か大切なことを学べるような気がする。それが何かはわからないけれど、それを見つけだすことが私にとっては一番大切なことのように思える。マレーシアの人々の目の輝きを見たいというのが今の私の気持ちだ。この体験を通して、私自身、強くて、優しく、物事を深く考えることのできる人になれたらいいと思う。今日、私は、いつでもどこでも寝てばかりいた。寝顔を撮られたことが一番ショック。今日寝た分明日は目をパチクリ開けてしっかり行動しようと思う。

3月28日(木)

今日はクアラルンプールからコタキナバルへまたまた移動。コタキナバルを見た第一印象“あらまあ 山ばかり”なんだか眠くなるような暑さだった。水上ハウス等も

見た。あまりいい環境ではなかった。でもそこに住む人々はとても明るかった。手を振ると向こうもそれに答えてくれたのがとても嬉しかった。

領事館表敬では日本とマレーシア、日本と世界のつながり等とても勉強になった。日本は他の国とのつながりで成り立っている。お互いの国を理解し、協力し合うことが一番大切だと思う。

協力隊事務所訪問、ウェルカムパーティでは隊員の方々の活動内容・生活の様子・村人とのつながりなど実際に話を聞くことができた。隊員のひとりが「なかなか村人にとけ込むことができなかった。折り紙が好きだったので、作ったものを窓に飾っていた。それを見つけた子供が教えてほしいと遊びに来た。次の日は友達を連れてきた。そうして一日一日と増え、大人までも興味を持ち、いつの間にか村人に溶け込んでいた。私は折り紙ができた事で村人と親しくなれた。」と話してくれた。

3月29日(金)

今日は朝早く起きて市場を見学に行った。みんな朝からとても元気だった。朝の空気は気持ちいいかな?と思ったのは大きな間

違いだった。

サリマンドゥ村へ移動。村に着くと食事が用意されていた。いきなり手だけの食事だった。村で最初の食事はとてもおいしかった。

食事の後はオリエンテーション・協力隊活動体験だった。私は保健婦の井上郁子隊員の活動を見学させてもらった。村にはゴミを集める車が来ないのでゴミは焼却しているということだった。まだ施設が整っていないので、ゴミがそこらに捨てられていて村が汚れている。そのためきれいな村にする為のポスター作成だった。村には係りがいてその内の男女各二名がポスター作成をしていた。井上隊員の話では「村人はボランティアという形ではあまり働こうとはしない。だから研修もかねてちょっとした旅行に行っている。」ということだった。一方的にものを押しつけてやらせるという事をしてはいけないのだという事が良くわかった。 村人とうまくやっていく為には、意見を出し合いお互いに理解しあうことが大切なのだと思う。

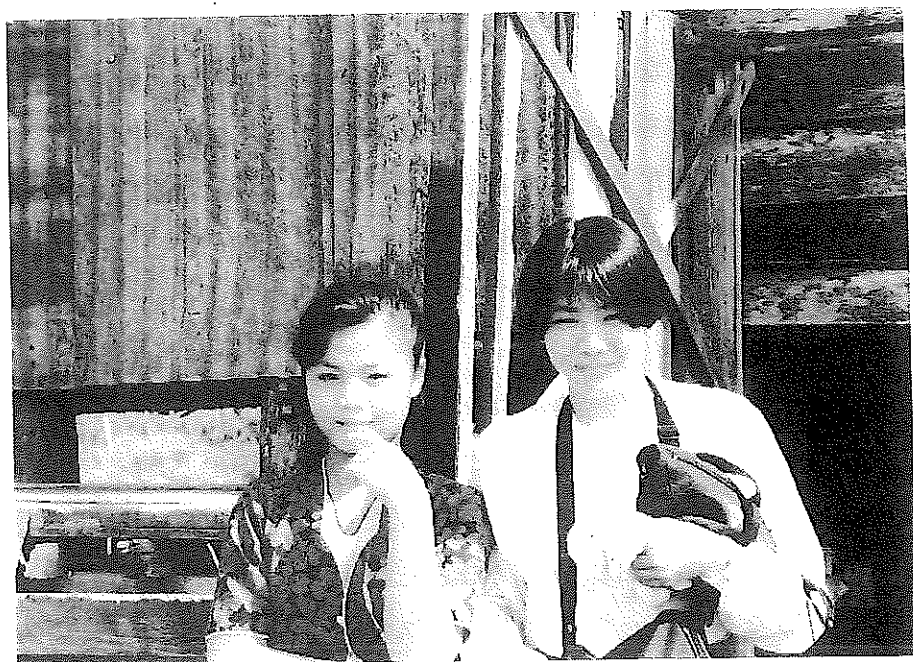
活動体験の後はいよいよ3泊4日のホームステイの始まり、ホームステイ先との対面式があった。私のホームステイ先はローリンさん宅で、両親に男の子

3人、女の子5人の10人家族だった。

### 3月30日(土)

四日目は各家ごとでの活動だった。ローリンさんはキリスト教徒でその日は安息日だった。朝散歩に出ると、稲刈りにいく途中の心ちゃんと真知子ちゃんに会った。私と狩集さんはどんなに仕事をしたくても絶対に仕事をしてはいけない日だから仕方がない。

家族全員で教会に行った。二時間以上じっと座っていなければならなかったので疲れた。ピクニックにも連れて行ってもらった。海に行くと言ったので楽しみにしていたら、なんと私が想像していた海(砂が白くてまっ青な海)とは反対だった。それから洞窟に連れて行ってもらった。3台の車に何十人の人が乗っていただろう?とても楽しいピクニックだった。今日は一日中仕事をしなかった。他の人、ごめんなさい。



### 3月31日（日）

今日は村人とのハイキングで”キヌモアリの滝”に行った。川を渡り、岩をよじ登り大変だった。自分の限界に挑戦するという気分だった。なかなか岩を登れないでいると村人がずっと手をかしてくれた。

目的地のキヌモアリの滝は本当にすごかった。それよりもこの場所を見つけた人の方がもっとすごいと思う。大人も子供も私達も一生懸命遊んだ。村人は“遊びの天才だ”。

ハイキングから帰ると私を待っていたのは稲刈りだった。初めはなかなかうまく刈れなかったが少しずつうまく刈れるようになった。小さい子供達がよく手伝いをするのに感心した。自分のことを考えると恥ずかしくなる。稲を刈る時のザクツという音と仕事の後が気持ちよかった。

夜は村人とのサヨナラパーティがあった。サヨナラパーティでは浴衣だった。村の民族踊りなど見せてもらった。みんなびっくりするほど可愛かった。村の男性とダンスをした。蝶をイメージしているということだった。その他ダンスやいろいろな出し物などとても楽しかった。賑やかなパーティだった。

### 4月1日（月）

3泊4日のホームステイも終わった。いつも“あかんべー”をして逃げるシュリアナが今日は一度もしなかった。家から集場所までの車では私のひざの上に座った。

帰りたくなかった。これからだと言う時に別れなければならないなんて……。3泊4日、短かった分無駄に過ごした時間はなかったと思う。この4日間たくさん笑ったし、泣いたし、優しさをもたらした。

### 4月2日（火）

学校訪問で日本語を学んでいる生徒達と会った。学び始めてまだ3年というのに、びっくりするほど日本語が上手だった。楽しみながら学んでいるという感じだった。短かったけどとても楽しい時間だった。歌を歌ってくれたのがとても嬉しかった。

今日は市内の史跡等の見学だった。ヒンドゥー教寺院と鍾乳洞が一番心に強く残っている。とてもすごかった。何か不思議な気分だった。

### 4月3日（水）

本当にアツという間だった。短かった分無駄に過ごした時間はなかったと思う。この事業で自分の目で多くのことを見、それに触れることができた。

一次試験の作文に“本当の豊かさ”とは何か考えてみたいというようなことを書いた。生活している中で自然に見つけたような気がする。そのことを一番感じさせたのが3泊4日のホームステイだった。このホームステイで人の深い心・強さ・優しさに触れたような気がする。自然に人を包み込むあの優しさは厳しい生活の中から生まれてくるのだろうか？

“本当の豊かさ”とは何かということについてはっきりと言いきることは出来ないが、やはり“本当の豊かさ”とは“心の豊かさ”だったような気がする。



# これが青年海外協力隊だ！

松崎 勝利

(阿久根高等学校 3年)

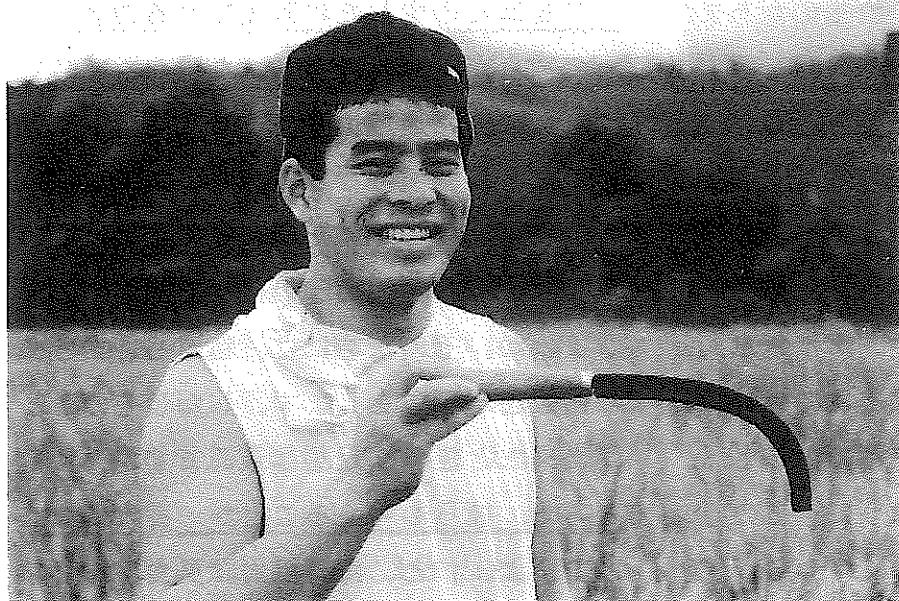
私は、日本とは人種・言葉・文化・生活様式の全く違う国マレーシアで生活してみ、様々なことを学び、考え、いままで見えなかった部分も見えてきたような気がします。

電気もなく、水道の蛇口をひねっても水が出ない、ましてや飲み水は一度沸騰させなければ飲めないような水です。車やテレビがある家もありますが、ほとんどの家は車やテレビはありません。お風呂もなく、川で水遊びでした。稲刈りも、コンバインなどの機械はなく手作業でした。現在の日本では考えられない世界です。

しかしやべれない私が、どうやって自分の気持ちを伝えれば良いのか、正直なところ不安でした。しかし、言葉も考えも文化も違う、しかも初めて会う人なのに、時間が経つにつれてお互いの気持ちが通じあうようになりました。私も素直な気持ちを相手に伝え、相手も素直に私に伝えてくれました。その中にもボディランゲージや英語などを使って苦労した面もありましたが、要するにどれだけ通じあっていたかが一番大切なことだと実感しました。言葉を話す以前の問題です。これこそ「おもいやり」というものではないでしょうか。このサリマンドウ

村に来て素直な自分に出会えたような気もするし、人間の愛情を感じることも出来たと思います。それに生まれて初めて自分が心からありがとうと言えたような気がします。

つぎに私はサリマンドウ村で生活し、現在の日本人にはないゆとりとか安堵感というものを覚えることが



私がマレーシアに行って一番苦労するのが言葉の問題だと思っていました。日本語

出来ました。日本人のように、勉強、受験、仕事と常にしぼられた世界ではなく、大自

然とともに生き、大自然の中で生活し始めると、私の心の中の「あく」がぬけて心が広くなるような気にもなりました。村の人々はいつも笑顔で、目は生き生きとして純粹できれいな目をしています。日本人の子供達のように死んだような目をしている子供は一人もいません。みんな、希望に満ちた素直な目をした子供達ばかりです。その子供達も私達を素直に受け入れてくれて、サリマンドゥ村に着いた日の夕方は、すぐに村の子供達と一緒にサッカーをして遊びました。最後の日など、私達のために村を上げてのサヨナラパーティをしていただき、村の人全員で私達を歓迎してくれて、なんと村の人々もめったに食べることでできない水牛の料理まで食べさせてもらいました。このうれしさは言葉では表現できないぐらいのうれしさです。

私が村の中で生活し始めて感じたのが、彼ら（村の人々）には欲というものがあまり感じられないということでした。日本人は、グルメブームとか、高級嗜好とかいって無駄なお金を使いますが、彼らはそのような無駄なことは一切しないし、また生活上必要ないのです。彼らにとって、その日の食事が出来ればそれで満足。車は新車、中古車関係なしにただ走ればそれでいい。別に電気がなくとも彼らは生活できている。しかも日本人のように一日の時間が決まっているわけでもなく「今日が無理なら明日があるさ」とこんな具合でのんびりと生活しています。そのあたりが日本

人とのゆとりの持ち方の大きな違いかもしれない。それに彼らは心が豊かです。差別もねたみもない、みんな平等という立場の世界です。けんかなんか、村にいて一度も見ませんでした。この言葉は海外協力隊の人がいわれた言葉ですが「最後にこの地球上で生きのびる人々は、ここの人々かもしれない。」と本当に思いました。

このサリマンドゥ村には4人の日本人の海外協力隊員が村の人と一緒に生活しています。協力隊だからといって別に特別なことをするわけでもなく、村で生活するだけです。しかしその生活の中で、村の人と一緒に何かが考えることが大切だと協力隊の人がいわれました。「私達日本人は、この村の人より技術的に見て進んでいます。むしろこの村の人々は、そのような進歩というものにあまり関心がないのです。そこで私達が持っている技術、アイデアをほんの少しだけ教えてやることによって彼らがそれに反応し、なにかを感じてくれれば、私達協力隊はそれで満足です。そのことが刺激になってつぎのステップへと彼らが考えてくれたら私達の仕事は終わりです。それが協力隊の仕事ではないのでしょうか。そのためには、私達もさまざまな勉強をし苦勞をします。しかしそのことが出来たときの満足感は最高ですね。私達も考え、彼らも考えることが一番大切なことですよ。」と、海外協力隊員食用作物の西村さんが言われました。「これだ、これが海外協力だ。」と、私は本当に思いまし

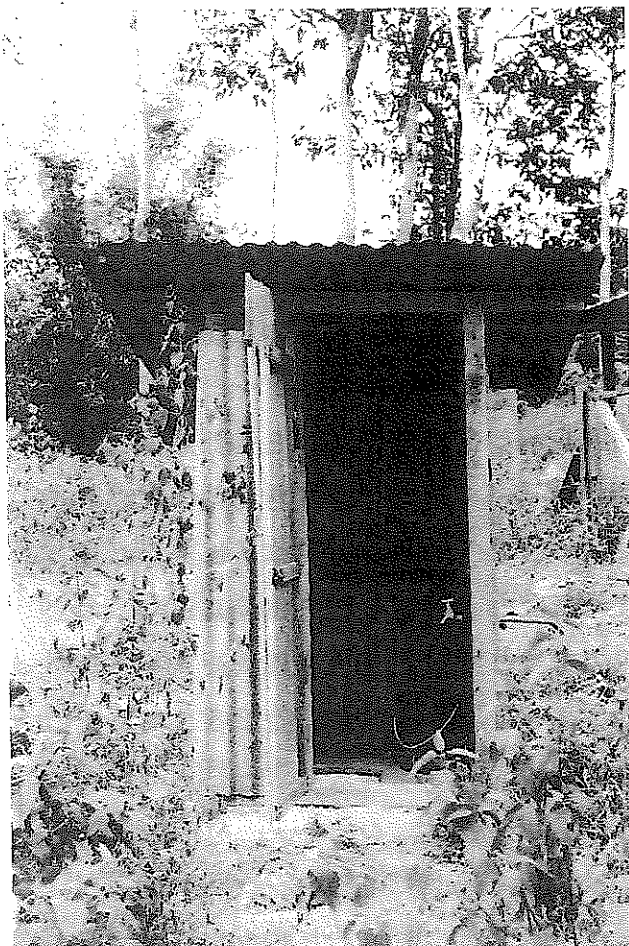
た。このことをマレーシアに学びに来たのかもしれないと、その時思いました。

このサリマンドゥ村に来て生活しているうちに、日本の立場や、日本のお金にしばらくされた社会のもろさが見えてきたような気がします。親は親で生活のために働き、子供は子供でくるったように勉強をする。何が楽しいんだろうとたまに感じるが、お金だけが、勉強だけが全てではないはずである。日本人は、本来の人間の在り方を見失っているように感じます。現在日本は世界有数の経済大国である。その日本が世界の中の日本という立場で物事（外国）を考えるなら、経済力だけで解決できない面もあると思います。しかも日本は外国との交流（貿易、原料輸入など）がなければ成り立たない国である。これは日本人が一番知るべきことだと思います。だから、お金だけの援助ではなく、心を援助すべきだと私は思います。

最後に、これらの体験で、自分のいままで見えなかった部分も見えてきたし、世界的な視野も広がったと思うし、自分が素直になれたことと、本来の人間の在り方なども学ぶことが出来ました。このことが今後の自分の人生に大きなプラスになればいいと思うし、それに加えて多くの人々にこの体験を伝え、理解してもらいたいと思います。

本当にありがとうございました。

早くて4年後は、協力隊員として再び…。





# 私の第二のふるさと「サリマンドゥ村」

坂口 晶子

(鹿児島東高等学校 1年)

## 3月27日(水)

結団式を終え、たくさんの人たちに見送られ、マレーシアへと向かった。なんといっても初めての海外。私の気持ちは期待と不安でいっぱいだった。

マレーシアに着いてわたしが思ったことは、マレーシアにはたくさんの人種がいるということだった。「日本とはかなり違っているな。」と思った。ホテルに着いて、初めて見たマレーシアの風景や人々を思い出し、そして、これから始まる「海外協力体験」に大きな期待をし、一日が終わった。

## 3月28日(木)

コタキナバルに着いたわたしたちは領事館を表敬訪問した。領事館では、マレーシアの事をいろいろ説明してくれた。私はその話で疑問に思ったことを質問した。説明を聞いて思ったことは、「マレーシアという国は、複雑な問題が多い国だな。」それと同時に「日本と言う国は本当に平和な国だな。」と言うことだった。

その夜は、青年海外協力隊の人たちにウェルカムパーティで出会った。協力隊の人たちは、私にいろいろな話しをしてくれ

た。話しをしているときの協力隊の人たちは、明るく、そして、目を輝かせていた。

「日本へ帰りたかったことはありませんか。」と聞くと、「日本で暮らしているよりも、こちらでいろんな人たちの役にたった方がいい。」と答えてくれた協力隊の人たちは、私にはとても偉大な人に見えた。「途上国で、生活しているのにどうしてこんなに明るいんだろう。」と思っていたが、その明るさは、きっと、「人に役立つ仕事ができる。」という満足感からきているのだと思った。「いつまでもその笑顔を忘れず、これからも多くの人たちのために頑張りたい。」と思った。そして私自身もサリマンドゥ村で、「人に役立つすばらしさを体験したい。」と思った。

## 3月29日

コタキナバルから百五十キロメートル離れたサリマンドゥ村に着いた私たちは、サリマンドゥ村の村落開発研修センターで受入家族と対面した。家族の人々は緊張している私たちを温かく迎えてくれた。楽しみにしていたホームステイだったが、不安と期待の気持ちでいっぱいだった。私がホームステイした家族の家は、電気も水道も普

及していたので安心した。事前研修で説明された「電気も水道もない。食事は質素。オフロの習慣がないので川で水浴び。」という説明とは全く違い、ホームステイ先の家ではかわいらしい寝室まで用意されていた。でも、ただ一つだけ私が大変気がかりだったのはトイレだった。マレーシアでは、左手は「不浄の手」。ティッシュの変わりを左手ですするという習慣がある。ホームステイ先のサリマンドゥ村に着くまでは「絶対トイレはティッシュを使う。」と思っていたが、サリマンドゥ村に着いて家族の人たちに出会ったとき、「少しでもサリマンドゥ村の人々の生活習慣になれたい。同じような生活をしたい。」と思い、思い切って習慣に従った。最初は、初めての経験だったので緊張したが、少しでも村の人々の生活に近づけたようでうれしかった。トイレがなんとか慣れたと思ったら、次は水浴び。バケツ一杯の水を渡されて、どうすればよいのか分からずにおろおろしている私たちに、お母さんが水浴びの仕方を教えてくれた。伝統衣装のサロンを身につけ、一杯の水を大切に使った。この時、「水というのは本当に大切なんだ。」と、日本にいたときは気付かなかった大切なことを考えさせられた。夕食を終えた私たちは、日本からのおみやげを家族の人たちに渡した。子供たちは日本のおもちゃで楽しそうに遊んでくれた。私も、子供たちと一緒に遊び、楽しい時間を過ごした。家族の人たちと会って、わずか数時間で親しみ、そして私が

トイレとオフロの二つの日本とは違う習慣を違和感なく「体験したい。」と思えたのは、サリマンドゥ村の人々の優しさや、言葉では表現できない何かがサリマンドゥ村にあるからだと思った。「どうすればいいのだろう」、「これは何だろう」と一日に何度も思った。そして、一番くやしかったことは、私の言っていることが相手に理解してもらえなかったときと、相手の言っていることを理解出来なかったことだった。でも、私の言っていることが相手に理解してもらえなかったときも、相手の言っていることが理解できなかった時も、家族の人たちは笑顔を見せてくれた。そして、一生懸命、英語で話してくれた。私は、笑顔を見せたり、見せられたりして、コミュニケーションをした。サリマンドゥ村の人々の笑顔が、大好きだった。

一日目のホームステイは何もかもが初めての経験で、なんとも言えない気持ちだったが、私にとってすごく充実した一日だった。

### 3月30日(土)

家族の人たちと、教会に行った。教会には、たくさんの方が来ていた。そして、私たちの回りにたくさんの人々が集まってきて、日本のことを聞いてきた。私はあまりよく知らないマレー語を使い、いろいろな話しをした。少しでも相手に自分の言ったことが理解してもらえたときは、本当にうれしくてうれしくてたまらなかった。

教会での勉強が終わった私たちは、村の人々と近くの川へ遊びに行った。村の人々が裸足で石の上を歩いていたので、私も裸足で歩いてみた。初めのうちは平気だったが、途中から我慢できず靴をはいた。この時は、我慢できなかった自分がすごく恥ずかしかった。

私たちが車に乗り帰ろうとしていたら、一人の男の子が「おなかがいたい」と、みんなに言っていた。すると、車に乗っていた大人たちがみんな車から降りて、お祈りを始めた。自分の家族でも何でもないので、みんなその男の子をすごく心配した。私はそういう村の人々の優しさが本当に大好きだった。私も「早く良くなりますように」と願いを込めてお祈りをした。帰りの車でも、「男の子のおなかが早くなおるように、歌を歌ってくれ。」と言うようなことを言われ、私たちは日本の歌を歌った。すると、今度は村の人々がみんなマレーシアの歌を歌ってくれた。歌を歌っているときの村の人々はとても明るくて、そして目をキラキラさせて歌っていた。私にはその目を見ているだけで、村の人々の優しさが伝わってくるようだった。「歌は国境を越える。」私たちは、日本の歌やマレーシアの歌をお互いに歌うことによって、昨日よりまた一歩サリマンドゥ村の人々を理解し、そして私たちのことを理解してもらえたようで、うれしかった。

日本では何気なく過ごしていた一日一日が、サリマンドゥ村では、とても大切に思

えた。そして、その一日の生活の中で、少しでも村の人々にいろいろなことを教えてあげたり、村の人々の役にたつことによって、人に役立つことのすばらしさやうれしさを感じることができる。「こんな自分でも役に立ってるんだ」という気持ちは、私に自信を持たせてくれた。そして、「何事にもチャレンジするぞ」という気持ちを持つこともできた。こんなすばらしいサリマンドゥ村での二日目のホームステイは、一日目以上に充実した一日だった。

### 3月31日(日)

「キヌモアリの滝に行く」ということで、私は楽しみにしていた。しかし、その目的地キヌモアリの滝は見えてこない。おまけに岩がすべるので、途中で何度も川へ落ちる。「もうこれ以上歩けない」と何度も思いながらも、みんなで励ましあい、助け合い、目的地のキヌモアリの滝に着いた。キヌモアリの滝に着くまでは、ズボンが少しでもぬれると「どうしよう」と悩んでいた私たちだったが、キヌモアリの滝に着いた途端、みんな人が変わったように、洋服のまま水の中へ飛び込んだ。そして、村人たちと一緒に遊んだ。今までのあの長く、つらかった道のりを忘れさせてくれるくらい、私たちは楽しい時間を過ごした。

そして、キヌモアリの滝から帰ってきた私たちは、家族の人々と昼食を食べた。キヌモアリの滝での出来事を身ぶり手ぶりで話すとみんな笑いながら聞いてくれた。

昼食を終えると次は農作業。なんといっても稲刈りは、初めての経験。かまの持ち方も知らない私は、村の人々に一つ一つ教えてもらった。少し上手になると、やる気もでてきて、しゃべることも忘れて熱中してしまうほどだった。「私が刈った稲を村の人々が食べてくれるんだな」と思うと、うれしくてたまらなかった。農作業が終わると、サヨナラパーティ。短かった3泊4日のホームステイも、今日が最後の夜。会場にはたくさんの人々が来てくれた。村の人たちと一緒に踊ったり、日本の踊りを踊ったり、マレーシアの踊りを踊ったりと、大変楽しかった。

そして、パーティのごちそうは、村人たちがその日の昼に解体してくれた水牛の肉だった。私は、解体するところを見ていたので、なかなか食べることができなかった。



楽しいパーティも終わり、家に帰った。家族の人たちは浴衣が大変気に入ったみたいだった。一緒に浴衣姿を写真でとったり、最後の夜だったのでいろいろな話をした。すると「いつまたサリマンドゥ村にくるの」と聞かれ、私はなんとも答えることができず、「いつになるか分からない。でも、必ずもう一度来たい。」と答えた。サリマンドゥ村での3日間は、あまりにも私にとって素晴らしい経験であった。そして一日一日が私にとって充実していた。でも、サリマンドゥ村での別れを前にした最後の夜はなんともいえない悲しい夜だった。

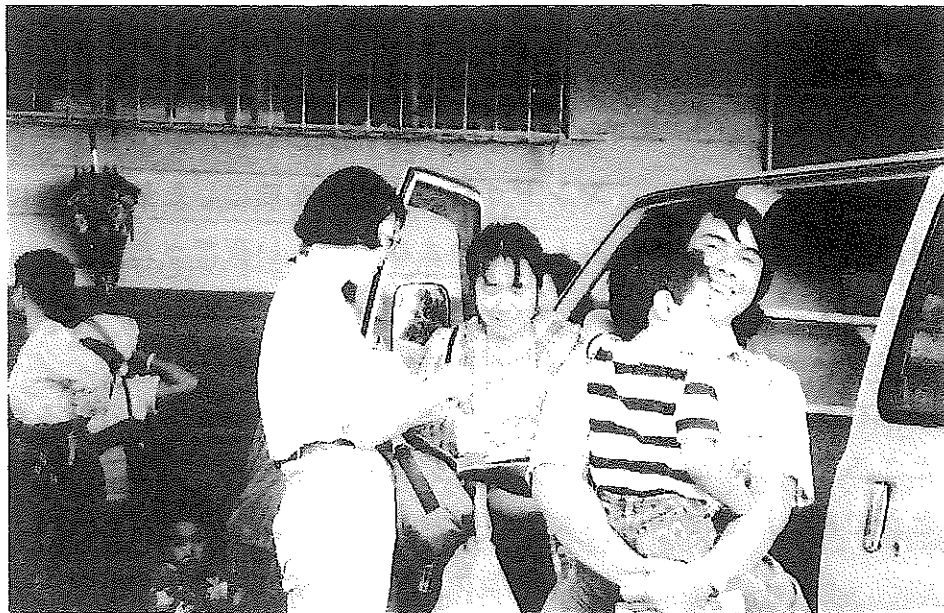
#### 4月1日(月)

家族との最後の朝食を終え、いろいろな話をした。何度も何度も、「いつ、またサリマンドゥ村に来るのか」と聞かれ、「必ず、またサリマンドゥ村に来るから」とい

い、家を出た。

村落開発研修センターに着くと、お母さんがかわいらしい紙に包んだお土産とお手紙を私に渡した。私も家族の人たちに「ありがとう。お手紙を書きます。絶対に忘れません。」と、あまりよく知らないマレー語で書いた手紙を渡した。すると、今まで笑って一つも悲しい顔を見せなかったお母さんが涙を流した。私は、

「絶対泣かない。」って思っていたのに、サリマンドゥ村での3泊4日のいろいろな出来事を思い出すと泣かずにはいられなかった。すると、お母さんが私たちの肩を抱きよせ、一緒になって泣いてくれた。「このまま、サリマンドゥ村に残りたい」と思うほど、私はサリマンドゥ村での生活や、優しい人々が大好きだった。



そして、サリマンドゥ村を出発しなければならぬ時間が来た。私は家族のみんなと握手をし、バスに乗った。私はバスの中からも大きく手を振った。バスが出発すると、悲しくて悲しくてどうしようもなかった。団員のみんなも涙目でだんだん小さくなっていく村の人々をいつまでも見ていた。手を振った。そして、お母さんにももらったお手紙を青年海外協力隊の人々に訳してもらった。その内容は「何もしてあげられなくて、ご免なさい。本当にご免なさい。でも、またサリマンドゥ村に来て下さい。」という内容だった。私は、この手紙の内容

を知ったとき、すごくうれしかった。私は、必ずもう一度サリマンドゥ村に行きたいと思っている。村の生活は決して豊かとはいえないが、貧しい生活の中でも人々は一生懸命生きている。私は、その一生懸命さと、そして村の人々の優しさは、絶対に忘れたくない。3泊4日のサリマンドゥ村でのホームステイは、いろいろな失敗をしたりした。でも、村の人々に助けられ、私にとって一日一日が充実した一日だった。もし、もう一度サリマンドゥ村に来たら、今度は私がみんなを助けることができるようになるように、これから一生懸命いろいろなことを学び、そして、いろいろなことをサリマンドゥ村の人々に教えたい。

サリマンドゥ村で、日本では気付かなかった大切なことを知ることが出来たし、いろいろなことを考えさせられた。その大切なことをいつまでも忘れずに、これからは日本だけではなく、世界のことも考えながら、一日一日を過ごしたい。

少しでも早くサリマンドゥ村の人々が豊かな生活をし、一人一人の子供たちが大きな夢を持てるようになるように、遠い日本からサリマンドゥ村の人々を応援し、そして見守っていきたい。

#### 4月2日（火）

私たちは、クアラルンプール郊外にある学校を訪問した。「学校の生徒たちは日本語を学んでいて、日本に興味を持っている。」と聞いていたので、生徒に会うのが楽しみだった。生徒たちは、「日本はどんな国ですか。」とか、私にいろいろな質問をしてきた。その後で、今度は私の方がマレーシアの生徒たちにいろいろな質問をした。短い間の生徒たちとの交流だったけど、「これからも、日本語の勉強をして、日本のことに興味を持っていて欲しい。」と思った。ホームステイも終わりマレーシアでの7泊8日の体験も、最後の夜だった。ホテルでそれぞれお土産を買った。そして、団員のみんなといろいろな話しをした。私たちは、サリマンドゥ村での思い出を語り、最後の夜を過ごした。

#### 4月3日（水）

マレーシアでの最後の朝食を終え、空港へと向かった。バスの中から見えるマレーシアの風景を、「必ずもう一度来たいな。」と思いながら眺めていた。福岡に向かう飛行機ではサリマンドゥ村での話をした。すると、「サリマンドゥ村にもう一度行きたい。」と団員のみんなも思っていたみたいで、私はうれしかった。帰りの六時間の飛行機の旅は、思い出話をしているうちに福岡に着いた。

そして、鹿児島に着いた私たちをたくさんの人が迎えに来ていた。みんなで記念写

真をとり、団員一人一人と握手をして、

「また会おうね。」と約束して別れた。その夜は、マレーシアでの出来事を家族に夜遅くまで話した。

私は、この7泊8日の「青少年海外協力体験」で、人に役立つすばらしさや、人々の優しさや、助けあうことなど、いろいろな大切なことを学ぶことができた。そして、いろいろな人と出会い、一緒に同じような生活をしてお互いの文化の違いを理解し、心と心が通じあえたことは、本当にすばらしいことだった。失敗を恐れず、新しいことにチャレンジしたことを忘れずに、これからの生活でも新しいことにチャレンジしたいと思った。7泊8日の貴重な体験は、私のこれからの生活の中で役立てたいと思う。そして、少しでも多くの人たちに、

「日本という豊かな国ばかりではない。世界中には、まだまだ貧しい国がある。」ということを知ってもらいたい。そのためには、7泊8日の体験は終わっても、私のやらなければならないことはまだまだたくさんあるような気がする。マレーシアで学んだ大切な事をどれだけ多くの人たちに理解してもらえるか分からないけど、精一杯頑張りたいと思う。そして、少しでも多くの人たちが発展途上国へ関心を持ち、そして、自分たちの日本の生活を見直してくれたらすばらしいと思う。

Rantina Madrus,  
Agriculture Department,  
P.O. Box 42,  
89107 Kota Marudu.  
Sabah.

3rd April 1991.

Dearest my love daughter "Shoko".

How are you now?

I hope you all family happy and fine. Your youngest sister and brother hear is very sad when you go back to Japan. What about you? My brother in law (Ronny) and all family are also. Welcome to Sabah again. Sorry my sweet girl, because the free gift (hadiah) is very simple made from Bamboo, and you can put the coin or other thing.

We know your family so happy when you go back to your country (Japan). We hope successful your study (exam) and can work in job. Don't worry you can stay here (my house) so long time, about two or three years. Please don't forget send (write) the letter and gift the photo.

See you again.

"GOD BLESS you All Family Always"

Your Mummy



1.10 Afternoon.

団員 坂口晶子さん

小西恵子さん のホームステイ先の家族からの手紙

# 青少年海外協力体験事業を振り返って

橋口 和典

(青年海外協力隊鹿児島県OB会事務局)

## はじめに

青年海外協力隊発足25周年を機に、鹿児島県の青少年を協力隊員最初の派遣国であるマレーシアへ派遣し、現地で活動する協力隊員や現地の人々との交流を通じ、国際協力のあり方を理解し、国際性豊かな青少年を育成するという趣旨のもとに、今回の事業を、青年海外協力隊鹿児島県OB会など関係3団体で一昨年より独自に企画し、全国に先駆けて実施することにした。

募集人員は県内の中学、高校、専門学校生10名とし、一次選考を平成2年12月16日に、二次選考を平成3年1月13日に行い、100名を超える応募者の中から、つぎのとおり団員を決定した。

大浦地拓生(中1)

加藤心(中2)

関真知子(中2)

寺師慶太(高1)

湊原政彦(高1)

山口正也(高2)

松崎勝利(高3)

坂口晶子(高1)

小西恵子(高2)

福永由美子(高3)

また、派遣団の

団長として、弓場秋信(実行委員会会長)、引率者として西田健郎(JOCVバングラディシュOB)、狩集尚美(JOCVホンデュラスOG)、吉村博幸(鹿児島国際交流協会)、報道機関の森岡和之(南日本新聞社)、牛尾純(南日本放送)、私の7名が加わった。

メンバー決定後、平成3年3月9日から3月10日にかけて、霧島で事前研修会を実施し、マレー語を含め、マレーシアに関する基礎知識を修得し、併せて団員相互の親睦を図りながらチームワークづくりを進めた。二次選考後、団員を決定したその日に湾岸戦争が勃発し、海外渡航に影響が出始めていて、この事業の実施も危ぶまれた





が、地上戦突入後4日ほどで、劇的に終結に向い予定通り実施することが出来た。派遣期間は、平成3年3月27日から4月3日であったが、手記として綴った全日程を記す。

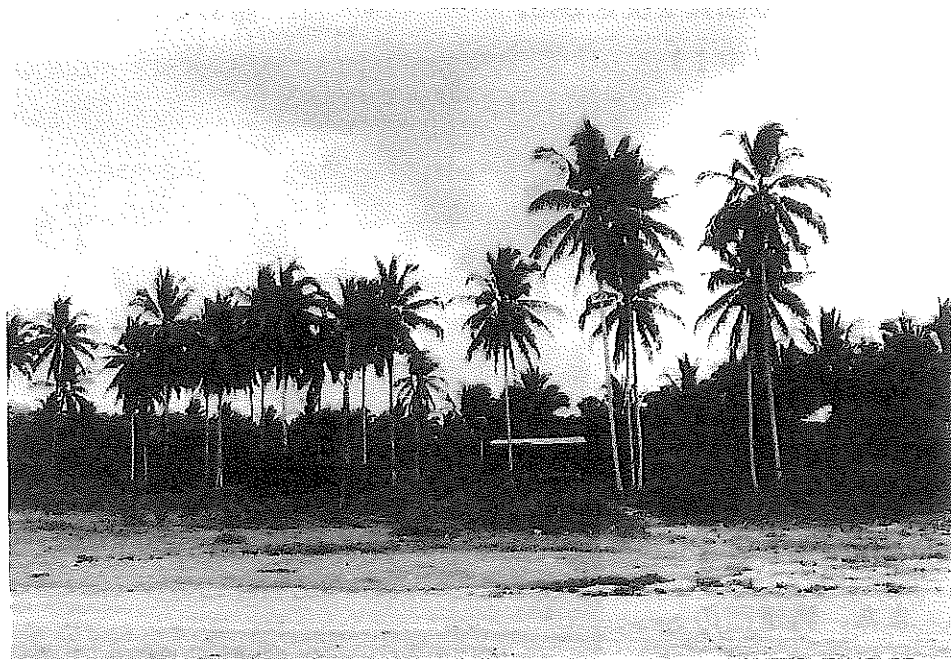
### 3月27日（水） （1日目）

定刻を30分ほど遅れて、17:30にMH83便は福岡国際空港を離陸した。団員10名中9名が初めての海外旅行ということもあって、みんな期待と不安が入り混じっているのか、楽しそうにしている者、少し緊張している者と様々である。離陸後1時間ほどは、話に夢中になっていたものの、しばらくするとほとんどの者が眠りについた様であった。今朝は、いつもより早く起きたせいであろう。午前中の結団式では、さぞや緊張したと思う。マレー語での自己紹介や、抱負などを述べた。

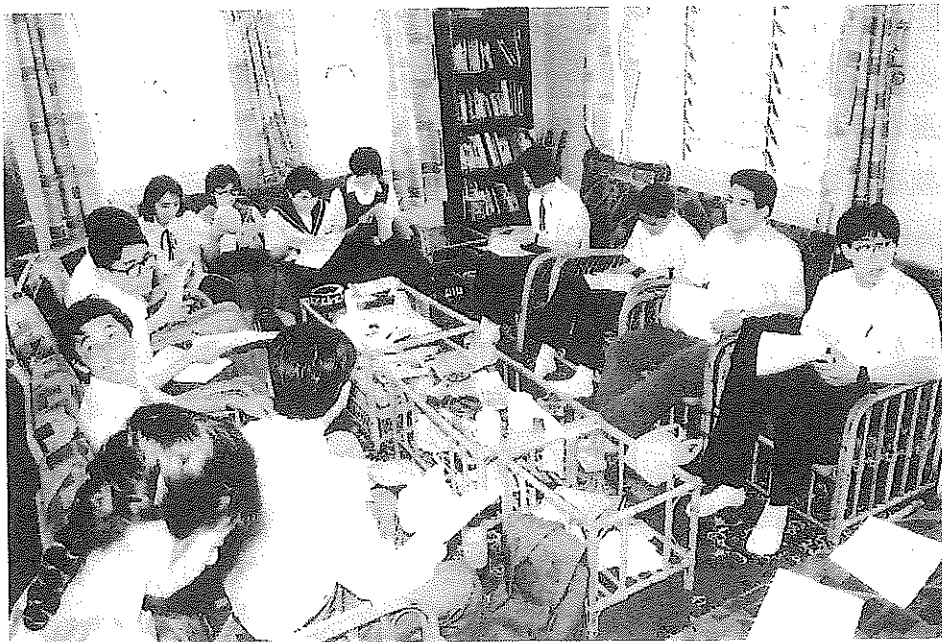
離陸後2時間半ほどすると、機内食を運んでくる物音にみんな目をあげ出した。夕食のMenuは、牛ヒレステーキとプロバンス風トマト等みんなさらりとたいらげてしまった。しばら

くして、生徒全員に日記を書いてもらうことにした。それぞれ感慨深い思いで筆を走らせている。やはり女生徒の方がよく書けている様だ。今朝起きてから搭乗するまでの心境や、結団式での出来事、合格の知らせを受け取って今日まで過ごした日々のことなど、様々な思いを記している。私が隊員としてホンデュラスへ飛び立ったときは、22才であった。期待と不安が交錯した気持ちはいまでも、はっきりと覚えている。この10名の年齢は、13~18才と若い。一体どういった思いでいるのであろうか。それにしても100数名の中から、選ばれた10名だけあって、みんなしっかりとしている。随行の7名とも、友達のように、何の屈託もなく会話に夢中になっている。

約6時間後、飛行機は現地時間22:08にクアラルンプール・スパン国際空港に着陸した。天候は曇り、気温は26°C。夜になったとは言え、やはりむし暑い。入



国審査、税関を通り、チャーターバスでフェデラルホテルへ向かう。ガイド役の中国系現地添乗員は、マレー語、日本語、北京語、広東語、福建語に堪能との事。さっそく覚えたてのマレー語で、話をしようとするが、流暢な日本語でさらりとかわされてしまった。ホテルに到着したのは23:30であった。明日はいよいよ憧れのボルネオ島へ。



3月28日(木)  
(2日目)

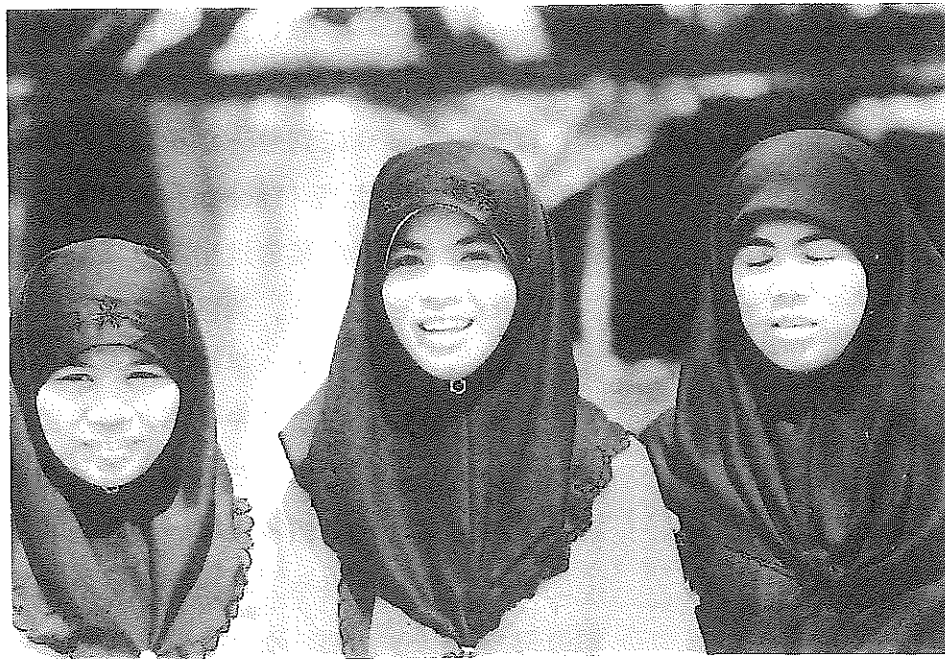
朝6:15に起床する。6:45からホテル内のレストランで朝食をとる。スパン国際空港へは、8:20に到着。天候は曇り、気温27°C。MH702便にてクアラルンプールを飛び立ち、コタキナバルへ向かう。機内で配られた中国語の新聞「南洋商報」には、昨日シンガポールで起きたハイジャックの記事が、一面を賑わせている。吉隆坡(クアラルンプール)発 新加

坡(シンガポール)行きのシンガポール航空117便が、4人組の巴基斯坦人(パキスタン人)に乗っ取られ、犯人側はパキスタン国内で投獄されている政治犯らの釈放を要求し、乗客等を人質に機内に立てこもったものの、シンガポール国軍の機内突入により犯人4人全員が射殺され、114名の乗客と乗員11名全員が無事救出された。私は、中国語を学び始めて約1年になるが、

新聞の見出し程度は、なんとか読めるようになっていた。新聞記者の森岡さんと中国語の読み方や、事件のことを話しているうちに飛行機は、正午過ぎにコタキナバル国際空港に着陸した。クアラルンプールのスパン国際空港と比べて見ても遜色が無い。宮川調整員の出

迎えを受けて、宿泊先のシャングリラホテルへは13:00に到着。ホテルの502号室の窓越しには、「Yaohan」の6文字が並んでいる。日本企業の進出ぶりに驚くと共に、安堵感を覚えた。気温は35°Cを超えていたであろうか、半袖のシャツからスーツに着替え、在コタキナバル領事館へ向かう。それにしても茹だる様な暑さである。領事館では今村領事より「現在、日本の置かれている立場や、将来国際社会で日本の果たすべき役割」などを話していただ

き、多忙であるにも拘らず、私達の為に貴重な時間を1時間もさいていただいた。領事館を後にして、JOCV Office に向かう。宮川調整員より、サバ州、サラワク州の事情や隊員の活動状況について説明を受ける。宮川調整員の軽快なりズムの語り口と天井からの扇風機の風が大変心地よい。夕方からの在サバ州の隊員たちによるウェルカムパーティまでの間、Yaohanへ6~7名で出かける。途中、貧民街を通り、改めて「ああ、ここは途上国だったんだな」とクアラルンプールの発展ぶりに驚いた私達は、ここの風景に妙に親近感を覚える。パーティが終わったのは、21:30頃で、弓場会長、吉村さん、狩集OG、私の4人で、マンディ（水浴び）用のサロンを買いに出かける。辿り着いたところは、Open Marketだった。インド人のおじさんとさっそく値段の交渉に入る。それにしても弓場会長の値切り方は、天下一品で



私達3人もあぜんとしてしまった。17名分のサロンを185リンギット（1リンギット≒50円）で手にいれた。

ホテルへ戻り、宮川調整員の車に乗り込みコタキナバル市内の見物に出かける。1977年に完成したという州立回教寺院（Sabah National Mosque）は、伝統美を随所に織り混ぜ、ライトアップされたそのスタイルは実に見事であった。時折、モスク内より聞こえてくる「コーラン」の神秘的な響きに、しばらくの間、我れを忘れて聞き入っていた。

3月29日（金）

（3日目）

ムスリムにとって、毎週金曜日は、一般的な礼拝が行われる日である。キリスト教の日曜日に似ているが、全くの休日というわけではなく、公共機関などは勤務時間が短縮される。心做しか、人通りが少ない。

コタマルドゥで、村落開発普及員として活動している金子隊員に同行してもらい、ホテルを出発、陸路、サリマンドゥ村へ向かう。

10:00過ぎ、ドゥスン族のタンパローリーの町へ着く。イスラムの民族衣装をまとった少女たちの姿が美しい。中身がなにであ

るか全く分けのわからない飲物を購入し、咽喉の渴きを癒した。数種類飲んでみたが、どの飲物も同じ様な味がする。但し、コーラは、やはりコーラであった。1時間後、バジャウ族のイスラム教



の町=コタブルに着いた。町の中心地に立派なモスクがある。金子隊員の話によると、数週間前に大火事があり、町の1/3ほどが焼けてしまったとのことであった。バスは平坦な道に別れを告げ、急な山道を登り始めた。行けども行けども山また山である。途中、コタマルドゥのJOCV Officeで休憩をとり、ホームステイ先である「サリマンドゥ村」へ到着したのは、午後2:00頃であった。コタキナバル~サリマンドゥ村間は約150km、4時間のバスの旅である。集会場となっている村落開発研修センターには、昼食の御馳走が準備されていた。洗面器に入れてある水で手を洗いさっそく右手を使って食べる。指の部分だけで、ご飯とおかずを混ぜて口へ持っていくのである。霧島での事前研修の際、マレーシアからの留学生ムルシド・イブラヒムさんから食べ方を習っていたので、それほど違和感はなかった。nasi (=ごはん) は、バナナの葉に包んで蒸したインディカ

種の米である。sup (=スープ) は、鶏スープでなかなかいける。昼食をとりながら、金子隊員がサバ州村落開発プロジェクトについて説明してくれる。サリマンドゥ村は、ドゥスン族の130世帯、500人の村人からなる村である。住民の宗教は、10%がイスラム教を信仰し、キリスト教も10%、残り80%の村人は無宗教ということだった。イスラム色があまり強くないということに少々戸惑いを感じながらも、内心は「ホッ」としていた。小学校は6年間で、土・日曜日は休み、中学校はこの村にはない。1987年に電気がつき、JOCVのプロジェクトにより、1987年に全戸に簡易水道が開通したとのこと、電気、水道のある暮らしは、まだ5年とたっていない。1986年から村落開発プロジェクトが始まり、現在は、食用作物、家畜飼育、保健婦、土木施工、村落開発普及員の5名で活動し、村民の自助努力を促しつつ、生活水準の向上を図っている。どの隊員もま

っ黒に日焼けし、遅しく見えるその姿は実に美しく光り輝いている。1時間ほど説明を受け、今度は各隊員に数名ずつ同行して活動現場を見て歩いた。夕方になると村人たちは、セパタクローをしていた。各ホームステイ先へは、19:30頃から向かった。拓生君と私のホームステイ先は、マスندان家であった。マスندانさんは、今回のホームステイ受け入れの実行委員長である。子供6人の8人家族で、日本人の隊員がこの村にいるものの、久しぶりの訪問客に近くの村人たちが何人もマスندان家に集まっていた。お母さんは、ちょっと気が強そうだが、面倒見が良さそうだ。さっそく、知っている限りのマレー語を駆使して自己紹介して、なんとか名前を覚えてもらおうとしたが、今日から2人の名前は「オノン」と「ウガウ」だと言われた。食用作物の西村隊員に通訳してもらい、「オノン」はドゥスン語で私の子供、「ウガウ」は、その兄弟という意味だということがわかった。こうして、ドゥスン語の名前をもらった拓生君と私はマスندان家の夕食の後、辞書を片手に23:00すぎまで悪戦苦闘しながらなんとかコミュニケーションしようと試みていた。

3月30日(土)

(4日目)

外のにわたりの鳴き声や往来のトラックの音が騒々しい。「もう朝なんだな」と思い時計を見る。まだ6:00である。サリマンドウ村の朝は早い。マスندان家の家族もみんな起きて、ラジオをがらがんかけている。30分ほどして、お母さんのオユティンが、「オノン」「ウガウ」と呼んで、私達を起こしに来てくれた。今朝の朝食はMIE GORENG(=焼そば)と目玉焼。マレー語のあまり出来ない2人は、間が持てないということもあって、日本ではめったにしないが「いただきます」と両手をあわせ、敬謙な仏教徒のふりをする。マレー社会でそうあるようにこの家庭でも、食事は男性と女性は別々に食べる。同席しているマスندانさん、長男のヘンドリボン、次男のロスランまでが、私達の真似をして手をあわせた。みんなの顔に笑みがこぼれる。外



に出てみると太陽はもう燦燦と輝いている。今日も暑くなりそうである。8:00に田んぼへ出てマスندان一家6人と拓生君、私で稲刈りをする。子供たち4人も稲を刈ったり、刈った稲を運んだりと一生懸命手伝ってくれる。手伝うというよりもここでは、子供たちも重要な労働力なのである。1時間ほどで1アールの田んぼは、あっという間に稲が刈られてしまった。ドゥスン語で「サビツ」という鎌で左から右方向へ刃をあて刈っていく。日本の草刈り鎌と使用方法が全く逆である。11:00からは、闘鶏が始まるというので闘鶏場へ行った。村人の楽しみの一つである。闘鶏場には、すでに40~50人の人だかりが出来ている。野菜や竹の子、ピーマンなどをバナナの葉に包んで蒸した料理「サンノベル」を口にしたが、いまひとつだった。闘鶏場をあとにし、マスندان家へ戻り、昼食をとった。アヤム=とり肉、サユールブガ=青菜、サユールティムン=冬瓜の入ったスープ、とり肉と野菜の炒めたもの、ごはんを用意してくれていた。スープは生姜風味で、暑さを忘れさせてくれるかのような、さっぱりとした味である。暑さのせいか拓生君の食欲が無い。その傍ら

で私はスープを4杯も御代わりしていた。1時間ほど昼寝をして、午後からはマスندانさんのゴム園へ出かけた。20エーカーほど所有しており、ゴム園だけの収入が将来には月に7,000リングット程見込めると話していた。夕方からは、村人とサッカーの交流試合をする。私達のチームのスーパースターは、なんと言っても拓生君である。彼の活躍にも拘らず試合は負けてしまったが、彼はこのひとときが一番輝いていた。夕食後、マスندانさんと話しをするが「もう、お前達はこの村へ残れ」と言うことなのか、彼はマレー語は教えてくれないでドゥスン語の単語ばかり教えてくれるのである。電灯の光にドゥスン語で「ポシサン」と呼ばれる「かめ虫」がたくさん集まっている中でドゥスン語の講義を受けた2人は23:00に床についた。



3月31日（日）

（5日目）

サリマンドゥ村での2回目の朝も、にわたりの鳴き声と共に目が覚めた。昨日の朝は少し涼しさを感じたが、今朝はちょうど良いくらいだ。ここでの生活のリズムにも少し慣れた様な気がする。マスندان家の次女は、朝早くから一家全員の洗濯をしている。今朝の朝食には、お客さんが一人同席しているが、誰なのかわからない。とにかく、いろんな人が入れ変わり立ち変わり入ってきては、帰って行くので、誰までが親族なのか、まるで見当がつかない。が、

実に楽しい。朝食後マスندان家からさほど遠くないロングハウス（＝長屋）にホームステイしている正也君、慶太君が私を見るなり「この村へやって来て本当に良かった。村人の心の暖かさに感動しています。来

年もぜひこの事業を続けて下さい。」と切り出す。随行者としては、この上ない喜びを感じる。その後、2人は私に会う度に、「ここに来て良かった。」と言う言葉を連発していた。

今日は楽しいハイキングの日である。総勢40人ほどで、サリマンドゥ村を出発し、

カンポンノロタンの村を通り過ぎ、溪流づたいにキヌモアリの滝を目指す。そこへは楽しいという言葉が、うその様に、岩がゴツゴツと点在し、険しい山道になっている。登り始めて1時間半ほどで目的地へ辿り着いた。滝では、それまでの登ってきた苦痛をはね返すかの様に、みんなはしゃいでいる。もちろん、水着などに着替えることもせず、服を着たまま水の中に飛び込んでいる。みんなの笑顔がとてもきれいだ。水でびしょ濡れになった服も、各ホームステイ先へ到着した頃はすっかり乾いていた。昼食後は、各隊員について協力体験を行う。



西村隊員に同行した男子生徒5人は、足踏み式脱穀機の改良に取りかかる。この脱穀機は、西村隊員がいろんな資料を基に試行錯誤して作った傑作品である。「協力隊員にとって一番大切なことは？」との問いに

「失敗を恐れずに最後までやり遂げる事」と明快に彼は答えた。

サリマンドゥ村での最後の夜は、サヨナラパーティで幕をあげた。会場の村落開発研修センターには村人300名ほどが集まり、はるばる遠くの村からやってきた者が数十名いたそう。パーティは始まったものの、来賓の挨拶が延々と続く。現地の隊員の話によると、こう言ったことはよくあり、むしろ前置きの挨拶が長くなればなるほどすばらしいパーティだと言うことであった。私達に出番が回ってきたのは40分ほどしてからであった。みんな思い思いの浴衣に身を包んだ私達は、鹿児島県の代表的民謡の1つである「おはら節」を踊り、拍手喝采を浴びた。続いて現地の子供達の踊り「ピナカン」が始まった。黒地に金色の刺繍を施した民族衣装に「ゴン」と言う打楽器の音色を合わせて踊る。よく見かけるバリ島の踊りに似ている。生徒10人もそれぞれ得意の「かくし芸」を披露し、歌あり踊りありのサヨナラパーティは、好評を博し、午前1:00近くまで続いた。



4月1日(月)

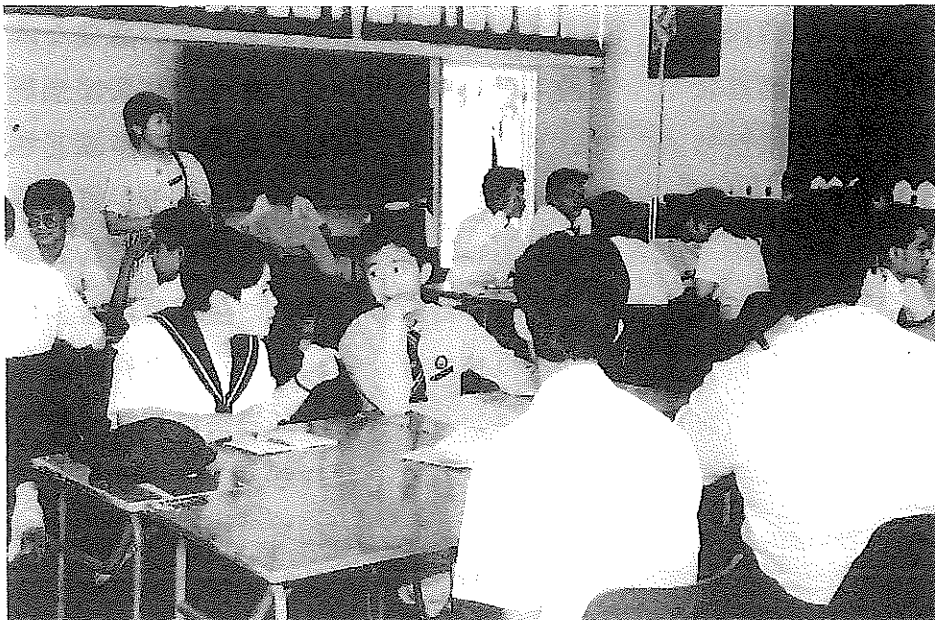
(6日目)

サリマンドゥ村に別れを告げる朝、村人と私達の別れのつらさが天に通じたのか、乾期であるにも拘らず、珍しく雨が降った。雨は私達が各ホームステイ先を出て、バスの待つ村落開発研修センターへ向かうときにだけ降ちて、いかにも別れを惜んでいるかの様だった。涙が乾く間もなく、私達は村人に「また、この村にやってくるからね」と言う最後の言葉を残し、バスに乗り込んだ。恐らく一生忘れることの出来ない3泊4日の思い出をかみしめ、バスはサリマンドゥ村をあとにした。1時間半ほどで、ティナンゴール村に着く。ティナンゴール村は、100世帯700人のルングス族の村。全員がロングハウスに住んでいる。ロングハウスには、一棟25世帯の村人がいた。「ロングハウスは、元来焼畑耕作をする人々のために造られた。」と、コタキナバルまで同行してくれる村落開発普及員の

坂口隊員から説明を受ける。村人達は、ルングス族の踊りを見せてくれた。サバ林業開発公社(Safoda)の植林地に立ち寄り、アカシア・マンギウムの植林状況を見学した私達は、クーラーもほとんど効かなくなっている車中で、昼食のおべんとう



をたいらげ、（と言っても暑さで、ほとんどの者が食欲がなかった。）15:00すぎにコタキナバルの空港に着いた。宮川調整員にお礼を述べて、MH543便は、18:55にクアラルンプール・スパン国際空港に到着した。夕食後、フェデラルホテルからさほど遠くないチャイナタウンへみんなで繰り出した後、私達はホテルの18階ラウンジで、ビールやジュースを片手に、クアラルンプールの夜景を見ながらサリマンドゥ村での思い出話を語り合っていた。



4月2日（日）

（7日目）

マレーシアの民族構成は、マレー系及び原住民58.6%、中国系32.1%、インド系8.6%から成る。地理や歴史の時間に、「マレーシアは複合民族国家であり……」と言う事を学んではいたものの、頭の中で理解しているつもりでも実際こうしてクアラルンプールへ着くまでは実感が

なかったのである。今まさにこの「人種のるつぼ」の中にいる自分自身を顧みて、「ああ、このことなんだなあ。」と街を歩き交う様々な人種の人達を見て痛感する。単一民族国家である日本の方が、彼らから見たら奇異に感ずるのかもしれない。9:00にホテルを出発した私達は、クアラルンプールの小幡調整員の案内で、旧モスク、レイク・ガーデン、王宮と足を延ばし、日本語教師として赴任している隊員2名の待つSekolah Alam Shahへ11:00に着い

た。スコラアラムシャーは、1963年に設立された国立の全寮制の男子校である。中学1年～高校2年に当る生徒が学んでおり、5:30に起床、消灯23:30と大変ハードなスケジュールで生活している。もちろん国内にある学校の中でも名門中の名門である。この

学校では、第2外国語として、フランス語、アラビア語、日本語の中から1つの語学を選択できるようになっており、日本語を学んでいる生徒達と日本語による懇談会を行った。日本語を学び始めて3年と経過していない彼らの語学力は、大変すばらしく、ほとんど不自由なく会話が出来ていた。校長先生や生徒達に、私達の訪問を非常に感謝されて、2時間半の有意義な時間を過ごした。昼食は、マレーシア料理店で取り、

パティック（マレーシアの伝統的な染布）の工場やヒンドゥー教の寺院のあるバツ洞窟を訪れた後、ホテルへ戻り夕食をすませ、お土産の買物をした。みんながベッドに横になったのは午前1：00を回っていた。

#### 4月3日（水）

（8日目）

湾岸戦争の終結をひたすら待ち望み、旅行の初日にはハイジャック事件が起こるといって、少しの不安と大きな期待を抱いて飛び立った私達の旅も終わりを告げようとしている。

日本時間4月3日。16：00に福岡国際空港に到着した私達は、国際線のターミナルから国内線のターミナルへと移動する。別に不思議なことではないのだが、待合室にいる乗客を見て、「どうしてここには日本人しかいないのだろうか？」と、いつもは到底考えられないことを思い、マレーシアでまさに「人種のるつぼ」の中にいた光景が架空のものだったかのような気持ちになる。日本国内で当然と受けとめられているものも、国外へ出るとそうは映らないことが多い。トイレトペーパーを使わずに、左手と水を使うトイレのマナーや、右手を使ってごはんをおかずを混ぜて口へ持っていく食事のマナーなど、最初は戸惑い少し抵抗感があったものの、慣れてしまおうとなんともないものである。国際交流とは、お互いの文化や習慣の違いを認めあうことだ

と私は思っている。

クアラ Lumpur では、マレー系、中国系、インド系の人々が、それぞれの歴史を負って集まり、形成されてきた街の一端を垣間見ることが出来た。サリマンドゥ村では、猛暑の中、初心を貫き通し、村人と共に逞しく光り輝いている隊員達や、貧しくても澄んだ目でいつも笑顔絶やさず振舞っていた村人達と出会えた。

近い将来、この10名の中から隊員として任地へ赴く日も必ずや来るであろう。今回の事業の実施にあたっては多くの人々の協力が必要であった。そして、そういった人々の協力により、ここまでこぎつけることができた。ここに記して心から謝意を表したい。

1週間ぶりに見る私達の鹿児島は、桜の花が満開であった。私達とサリマンドゥ村の人々との交流の和がつぼみとなり、いつの日にか花開くであろうことを願いつつ、私達はタラップを降りた。Salimandut という10文字が、いつまでも頭の中から消えなかった。

#####

表題の「ジュンパ ラギ！ カンボン サリマンドゥ！」とは、「また会いましょう！ サリマンドゥ村よ！」という意味です。

#####

## あとがき

～団員のみんなへ～

第一回目の鹿児島県青少年海外協力体験事業も、あっという間に終了しました。私達が初めて出会った霧島の事前研修会では、みんなまだ慣れていなかったせいか、何かよそよそしい感じがしましたが、7泊8日の旅を終えて、帰国報告会も終わり、兄弟、姉妹のように和気あいあいとみんなが会話している姿を見て無上の喜びを感じます。この7泊8日で、いろんな事を学び、体験し、そしてずいぶん成長したなと思います。

協力隊員の活動する現場を見て、「いつの日か、私もこのようになりたい。」と、遅しく輝いている隊員の姿に感動し、憧れを持ったことだと思います。また、貧しくてもいつも笑顔を決やさず接してくれた村人達の姿も忘れられないと思います。

空港では、忘れ物に気づきターミナル内を駆け抜け冷や汗を流し、ホームステイの3日間は稲刈りに人一倍玉なす汗を流した真知子ちゃん。

村人とのサッカーの交流試合で大活躍し、水牛の背中に揺られながら得意顔になっていた拓生君。

「おにいちゃん、おにいちゃん」となついで、私のことをまるで同級生のように思い、たんぼですいかを食べている姿が一番かわいかった心ちゃん。

水牛の解体を目のあたりにして「見たくないな」といいながらもカメラのシャッターを切っていたポーカーフェイスの政彦君。

トイレのマナーも何ともせず、サリマンドゥ村での別れの朝思わずこらえ切れずに泣きだし、大粒の涙が止まらなかった晶子ちゃん。



「ここに来て本当に良かった。」ということは何回も語り、電気も無いロングハウスの生活がとても気に入ったと話すジャーナリスト志望の慶太君。

テレビカメラを前にしても決して臆することなく、さっそうとサロンを身にまとい、気持ちよさそうにマンディをしていた恵子ちゃん。

「この体験を通してこれからの僕の人生の進むべき方向が見えた。」「将来は獣医師として協力隊に参加したい。」と熱っぽく話す正也君。

子供が大好きで、体を動かすのが好きで、大いに笑い、そして泣き、「本当の豊かさ」

とは何だろうと自問自答していた由美子ちゃん。

チャレンジ精神旺盛で何事にも興味を示し、川でのマンディや断食を物ともせず奮闘していた、笑顔のよく似合う、みんなのリーダー的な存在の勝利君。

私もこの10名のおかげで、楽しい思い出を作ることができました。おそらく、みんなのことは、サリマンドウ村の人々も一生忘れることはないでしょう。これからは自分の目を通して目標を持って、夢に向かって努力して行って欲しいと思います。そして、いつの日か、協力隊員として任地へ赴く日が来ることを願ってやみません。



# 編 集 後 記

吉村 博幸

( (財) 鹿児島県国際交流協会 )

鹿児島県青少年海外協力体験事業団員による体験報告書を、悪戦苦闘の末にようやく完成させることができました。

3月27日の出発のときには、緊張のせい、生気のなかった団員たちの顔が、4月3日に鹿児島空港に帰り着いたときには、陽に焼けて浅黒くなり遅しさを感じさせ、またその瞳は、「マレーシアで体験したことを誰かに話さずにはおれない。」というような気持ちの高揚できらきらと輝いていたことを思い出します。

マレーシアでの8日間は、とにかく暑い中での移動・農作業・交歓会と、めまぐるしい日程で息つく暇もない旅となりましたが、団員たちは決して音をあげず、実に伸び伸びと楽しみ、同行した私達おじさん連中は完全に置き去りにされた思いがしました。

この報告書をまとめてみますと、団員たちに共通している感想は、サリマンドゥ村の村人の素晴らしい愛情とやさしさ、素朴さ、そして大らかなその生きざまに心打たれたというものです。偽らざる正直な感想だと思います。

また、現地の青年海外協力隊員の活動に対しても、現地に溶け込み、決して気負うことなく、淡々と村人の生活向上のために努力するその姿勢に、今までの自分の考えの過ちに気づき、国際協力に対する理解を新たにした団員もいました。

8日間の協力体験事業だけで、団員たちに国際協力についての十分な理解を求めることは不可能ですが、今後の人生の中で、外国との関係なくしては生存し得ない日本の置かれている現状を認識し、また、異文化の壁を乗り越えて世界の諸国と交流することの重要性、素晴らしさを、常に心に持ちつづけてほしいと思います。

当事業の実施に当たって大変大きな御協力を賜りました、国際協力事業団青年海外協力隊事務局、国際協力事業団九州支部、鹿児島県、在コタキナバル領事館、JICAマレーシア事務所、JOCVサバ事務所、サリマンドゥ村現地隊員、スコラ・アラム・シャーのラオフ校長先生及び日本語教師隊員ほか御支援をいただきました皆様に厚く感謝申し上げます。